
G i r l s B r a v o ! (Dear Girl : 三田村亜希子の場合)

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Girls Bravo! (Dear Girl: 三田村亜希子の場合)

【Nコード】

N6003B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

性同一性障害…そんな事を知ってか知らずか、三田村亜希子は自分の心と相違する身体に対して違和感を持っていた。中学の時にレズビ안의娘に出逢った事から、亜希子は身体的同性である女性を性的欲求の対象とし始める。その欲望は、膨れ上がる孤独感に比例するかのように増していった。しかし、亜希子にはその苦悩を打ち明ける友達などいなかった…Girls Memoryに登場した亜希子のスピンオフ作品。

第1話（前書き）

これは、Dear Girlの続編に登場した真夕の後輩にあたる三田村亜希子が、横浜に住んでいた時のお話です。真夕の話と違い、あまり爽やかさは無く、少し生々しい描写もありますのでご了承ください。独立した物語になっていますが、亜希子の詳細はGirls Memoryにも含まれております。

第1話

山下公園に外人墓地。中華街に大観覧車。高く聳えるランドマークタワー。何処かお洒落な気持ちで来た横浜だったが、僕の家が引っ越して来たのは俗に言う横浜ではなく、横浜市にある下町情緒豊かな鶴見。

ここからは海は見えない……

実際は鶴見にも海も港もあるが、ここからは潮の香りはしない。父親の転勤に家族3人でついて来たが、どうやら失敗だった。

横浜と言えば桜木町や元町をイメージしていた僕は、かなりガツカリした。

住み慣れた春日部の方がよっぽどマシだった。

しかし、学校へ通いだしてその気持ちもかなり変わった。

同じクラスにも、隣のクラスにも僕好みの可愛い娘を見つけたのだ。

彼女らをどうにかモノにしようと、今からワクワクする。

それに、よく考えてみれば住宅街なんて、何処もこんなものだろう。

中華街や元町は特別なのだ。僕は自分にそう言い聞かせて納得する。

僕の名前は三田村亜希子。

でも、残念ながら僕は女の子ではない。

確かに、誰がどう見ても身体は女の子だ。

すらりと細い身体は少し自慢で、入学式当日から何度も男子生徒に声を掛けられた。

「横浜初めてだから、ヨロシクね」なんて、笑顔でいったら、どいつもこいつもヘラヘラしながら名物デートスポットの話などを切り

出す。

しかし、僕はそんな男共に全く興味はない。
別にレズビアンなわけでもない。

僕は、僕。この心はれっきとした男なのだ。たぶん……

だから、僕が興味のあるのは、女の子。

至極当然の事なのだ。

何時からこうなのか、僕自身もよくは判らない。

ただ、かなり幼い頃から自分の身体に違和感を持っていた事は確かだ。

何時も男の子に混じって遊んでいた気がする。

でも、中学に入ると、次第にそうは行かなくなる。

男は男らしく、女は女らしくなって、異性と言うものを意識し始めるからだ。

周りがどうとか言うよりも、僕自身がクラスの女の子を意識しました。

それと同時に、自分に向けられる男の子達の何だか異様に熱い視線。

小学生の頃から親しかった謙一は、僕のせいでイジメに合ってしまった。

僕が個人的に親しくしていたものだから、他の男子生徒、僕に気がある連中のなかで比較的勢力を持つグループからボコにされてしまった。

「もうヤダよ。お前といるのはイヤだ」

謙一は僕にそう言った。

「わかったよ……」

あれだけボコられたら仕方がない。

僕と謙一の5年間に及ぶ友達としての関係は、あっという間に消えて無くなった。

僕は孤独なのだ。

男の心に女の身体……実際どっちが元なのか。自分はどちらに属す生き物なのか……

僕は、恒義つねよしという、謙一をボコツた連中の中心人物を放課後呼び出した。

次の日曜日、デートを装って一緒に渋谷に出かけた。

恒義は何も知らずにニヤケながら僕の横を歩く。

時折いい気になって肩に手を回してきたりして、気持ち悪い以外の何モノでもない。

センター街を歩いていたとき、正面からアヤシイ3人組が歩いて来たのが見えた。

一人はロン毛の金髪、もう一人は坊主で顔に幾つもピアスが着いている。そしてもう一人は頭にバンダナを巻いて、二の腕イッパイにタトゥーが入っていた。

ちょうどいい、あの連中に決めた。

恒義も前方の3人には気づいていたらしく、僕の肩を抱きながら彼らの進行方向を妨げまいと端の方へ寄っていきこうと、身体ごと押ししてくる。

僕はキャッキヤと恒義にまとわり着くふりをしながら、押し返す。そして、3人の男たちとすれ違う瞬間、大げさに彼を押しだす。

「やだあ、恒義ったら」

恒義はタトゥーの男にぶつかった。

こういう連中なら、軽く身体が触れるだけでも充分効果はあるだろう。

「イッテエ」

ガ体のいいタトゥーの男は、大げさに叫んで立ち止まった。

「すいません」

恒義はとっさにそう言った。

「おいおい、謝って済む事じゃねえだろ」

ボウズのピアス男が、静かな口調で言った。

「ちよつと、こつち来いよ」

金髪のロン毛が恒義の肩に腕を回す。

恒義も、中学生の割には大きい方だが、3人の男はそれより一回り大きい。

彼の表情は既に脅えきつて、顔面が蒼白だった。

「そっちのお姉ちゃんにも、お詫びに何かしてもらいてえよな」

ボウズがそう言いながら、僕の細い身体を舐めるように見る。

「何かつてなんだよ。おめえエロいよ」

金髪が言った言葉に、ボウズの視線が横を向く。

僕は一気に走り出した。

「なんだよ、楽しいのに」

背中から声が飛んできたが、3人のうちの誰の声かはわからなかった。追いかけられない事を祈りながら走った。

「おめえはこつちだよ」

一度だけ振り返ると、恒義は3人に囲まれながら細い路地へ連れ込まれるところだった。

……ざまあみろ。

僕はべつに謙一の仕返しをしたわけではなかった。

僕を孤独に追いやった奴らへの、自分自身の為の復讐だ。

恒義は月曜日から一週間学校に来なかった。

クラスが違うので、全く気にも留めなかった。

一週間後にまだ痣の残る顔で登校してきた恒義は、人が変わったように大人しくなっていた。

それ以来、僕は男に、つまり心の同性には気を許さなくなった。

そして、身体の同性である少女たちと過ごしながら、ひとりモンモンとした日々を過ごした。

第2話（前書き）

これは、Dear Girlの続編に登場した真夕の後輩にあたる三田村亜希子が、横浜に住んでいた時のお話です。真夕の話と違い、あまり爽やかさは無く、少し生々しい描写もありますのでご了承ください。独立した物語になっていますが、亜希子の詳細はGirls Memoryにも含まれております。

第2話

初めてそういうことをしたのは中3の春だった。

クラス替えがあり、今まで知らなかった娘とも近づく機会ができる。

洋子は少し影りのある、あまりぱっとしない娘だったが、少し長めの睫毛とスジの通った小鼻が意外とカワイイ印象を与える。

だから男子にも人気はあった。

人気はあっても、社交性に欠ける彼女と楽しく話せる男はいない。僕以外には。

僕は女性の身体を利用して、彼女と同性として親しくなっていた。

しかし、女同士でも普通のスキンシップ以上に身体に触れるのは、いささか気が引ける。

僕は彼女たちを女として認識すればするほど、自分はその異性に値すると自覚してしまうのだ。

それは、彼女達の身体に触れたいという欲求をも促進させた。

もう四月も終わる、ゴールデンウィーク直前の事だった。

「ねえ、亜希子。今日うち寄ってかない」

「いいよ」

洋子は僕を当たり前の女として手を繋いでくるが、僕はもちろん、男として彼女と手を繋ぐ。

しかし、彼女の部屋でジュースを飲みながら話していた時、途端に洋子は僕に抱きついてきた。

いきなりの事で、さすがの僕も動揺した。

洋子は服の上から僕の小さな胸に手を当てて、そして撫で回す。

「よ、洋子？」

「ごめん、ごめんね。あたし、こんななの……」

洋子は僕の肩に顔を埋めながら何度も「ごめんね」と言った。

彼女はレスビアンだった。

いや、本当にそうなのかは判らない。

彼女の長い髪が、僕の鼻先に垂れて揺れる。

フローラル系の甘い香りが漂って、心地いい。

何だかよく判らないが、僕はこのチャンスを最大限に使わせてもらう事にした。

僕が彼女の胸に手を当てると、洋子は一瞬驚いていた。

その胸は、思いの外大きく感じた。

彼女のやわらかい唇に自分の唇を重ねる。

洋子は息を荒げて、舌を絡ませてきた。

経験があるのか、本能なのか、あまりにも濃厚なキスは、二人の身体を熱くさせ、そしてしつとりと濡らした。

自分と同じ身体だから、初めてでも相手の感じる場所は熟知している。

僕は自分の知りえる事を全て洋子に施した。

息を荒げる彼女は、何時もより大胆で可愛らしかった。

洋子の細い太ももは、ひんやりとしていた。

女性の白い身体は、柔らかくてスベスベして温かい。そして、何故か内ももは冷やりとしている。

もちろん自分の身体も女性だが、自分を自分で触るのは全く感触は違う。

僕は、この日から心の異性、身体の同性に対して、果てしない性的意欲を感じるようになった。

しかし、誰でもいいというわけではない。

一見仲良くしていてもそそられない娘もいるし、話もした事の無い娘にやたらとそそられる事もある。

僕は、どちらかと言うと、後者を選び、性的意欲の対象にしてから近づく事が多い。

自然に親しくなった娘は、やはり身体的同性の友達として確保しておく必要がある。

学校社会というものは、そういうものだ。

そんな気持ちで生活していても、そうそう直ぐに誰かと関係を持てるはずも無く、当面は洋子との秘密めいた関係が続いた。

彼女自身も、身体を交えるのは僕が始めてだそうだ。

当然彼女は僕の事もレズなのだと思っているし、その方が都合がいいだろう。

しかし、あくまでも僕は、洋子を男として抱くのだ。

第3話

洋子は僕にとってあまりにも都合のよい娘だった。

男子生徒とは殆ど言葉を交わさないし、女子の中にも特に親しい友人はいない。

「信頼するのは亜希子だけ」と言う彼女は、とても愛おしい存在だった。

僕は中3の一年間で、他校の娘も含めかなりの数に関係を試みたが、身体の関係まで行っただのは洋子を抜かして五人だけだった。

それでも長くは続かない。みな嫌悪を抱きながら半ば無理やり僕の餌食になり、殆ど二度目はない。

それでも僕は洋子を含め三人と定期的に身体を交えた。

その頃の僕には、それ以外に特に楽しみは無かった気がする。

隣のクラスの美香と隣の中学に通う多佳子。そして、洋子。

それぞれが違う身体をしている事に興味を引かれて、誰も離れたくはなかった。

異常な行為と知っている彼女たちは、当然誰にも喋る事は無いから、三又を掛けていても全く誰かに知れる事はない。

しかし、いつぺんに全てを失う時が来た。転校だ。

いや、実際は中学を卒業してから引越したから転校にはならない。

受験する高校も決まっていた年末、父から話を聞いた僕はショックを隠せなかった。

それでも、同じような偏差値で入れる横浜の高校を受験して、3月下旬にはここ鶴見に引っ越して来た。

また一からやり直しかと思うと何だかウンザリする気持ちが大きかったが、心機一転いい娘を探そう。

僕は高校に通いだして、そう思った。

「ねえ、亜希子。明日元町に買い物行くけど一緒にいかない？」

「うん、いいよ」

クラスで一番仲良くなったのは、北沢昌美。

最近髪を短くしてカラーリングした僕とは対照的に、長い黒髪を風に揺らしながら跳ねるように歩く姿は、元気があってどこか清楚だ。

僕も身体の線は細いが、彼女は背丈がある分スタイルはいい。

もともと少し茶色の瞳は、父親のお爺さんがクォーターなのだそうだ。

最初に見て、その容姿が一番気に入っていたのに、一番仲良くなってしまうた為、どうにも手が出せなくなってしまうた。

「アッコって東京にいたんでしょ」

「東京っていうか、春日部ね」

「春日部？」

「埼玉だよ」

「なあんだ」

「でも、東京まで直ぐだよ」

「本当に？」

昌美はさいたまと聞いて、少しバカにしたように笑う。

「でも、ここから東京までと大差ないかな」

昌美はそれを聞いて、再び笑った。

彼女は横浜生まれの横浜育ちだ。

僕たちは元町まで繰り出して、買い物をしたりしてブラついていった。

昌美は横浜の色々な場所を知っていて、細い路地裏の雑貨店なんかに立ち寄りたりする。

一息ついて僕たちは、ジェラートの店でアイスを買い、外のベンチに腰掛けて食べた。

「ねえねえ、暇そうじゃん」

ナンパ男が声をかけて来た。

「ぜんぜん。忙しくて今やっと一息ついたところ」

「そうなの？ ハツパとかあるけど、一緒にどう？」

「忙しいから遠慮しておく。ごめんね」

昌美は、そう言ってさりげなく微笑んだ。

「そっか、忙しいんだ」

「うん」

「じゃあさ、夜時間空いたら駅前のクラブおいでよ」

「でも、あたしら高校生だよ」

「んなの平気平気」

男はそう言って笑うと、片手を上げて立ち去った。

後ろのポケットから、なにやら大きな鎖をぶら下げていて、それが歩きたびにジャラジャラと音を鳴らしている。

すると、少し先のベンチにいた娘に、彼は再び声を掛けていた。

僕は思わず昌美と顔を見合わせた。

そのまま何となく行き交う人の波を見ていると、通りの先の歩道に、黄色いポルシェが勢いよく乗り上げて停まった。

出てきた運転手の女は、何食わぬ顔で何処かへ出かけていった。

ずいぶん、大胆な路駐だ…… あんなのあり……

「ねえ、アッコは誰か気に入った人とかいる？」

「えっ？ 気に入った人って？」

人波を眺めていた僕は、その質問にポカンとして訊き返した。

「学校だよ」

ああ、なるほど。目の前にいるよ……

「ううん。別に」

「あたしは、塚本先輩がいいなあって」

塚本とはバスケット部の2年生で、1年の時からポイントゲッターとして試合に出ているそうだ。確かに他の部員がただゴツイだけにも関わらず、彼の笑顔は妙に甘い香りを漂わせている。

昌美もけっこうミハーと言っわけか……

「まあ、いいんじゃない。でも競争率高そう」

「それがいいんじゃない」

昌美はそう言って、黒い髪をかき上げた。

僕は黙って、彼女の白い指を見つめていた。

第4話

ゴールデンウィーク中の日曜日、僕は近所のコンビニで買い物をしていた。

「よお、三田村じゃん」

同じクラスの三浦^{みつうら}紀が声を掛けてきた。

「あれ？ オサムの家ってこの辺」

「ああ、この裏」

僕は入学式当日に声を掛けてきた男子とはあまり仲良くしていない。知り合い程度にはなったが、何だか親しくする気にはなれなかった。

コイツは出席番号も近いせいで、朝礼の列も教室の席も近いが、必要な事以外で声を掛けてきた事はなかった。

サッカー選手の三浦カズにあこがれてサッカーを始めたらしいが、髪型まで真似ているのが何だかおかしい。

「何だよ、日曜日に一人でコンビニ？」

オサムが笑いながら僕の買い物カゴを覗く。

「いいだろ、別に」

彼はカゴの中のカップめんを見て再び笑った。

「自分で何か作らないのか？」

「いいじゃん、面倒くさいよ」

家には母親がいるが、あまり一緒にいたくない。

僕はオサムのカゴを見て

「あんただって」

「俺は男だからいいんだよ」

そんな話をしながら、清算を済ませたカップめんにお湯を注ぐオサムにつられて、僕も自分のカップめんにお湯を入れた。

空は青く晴れ渡り、海へ続いていた。って言うか、たぶんそうだろう。海は見えないけど……

僕たちはコンビニの外へ出ると、駐車場の一番端まで行って縁せきに腰掛けた。

「お前変わってんな」

「な、なんで？」

「女が普通、こんな所でカップめん食うか？」

「いいだろ。オサムにつられたんだよ」

僕たちは、熱いラーメンを啜りながら暑い陽気に照らされていた。

「亜希子は、見た目とずいぶん違うんだな」

「なにが？」

僕はそう言いながらめんを啜る。

「もつと、女らしいと思ってたよ」

「そう？」

「いや、活発そうだとは思ってたけどさ」

オサムはいち早くスープを飲み干すと、ポケットからタバコを取り出した。

キンツと音を立てたライターに火が灯る。

「でも、食べるスピードは女らしいな」

「ほつといてよ、猫舌なんだよ」

僕はそう言いながら、スープを啜る。

彼はおいしそうに煙を吸って、空に向かって吐き出した。

そしてオサムは、自分のポケットから冷たいお茶を取り出すと、僕の横に置いた。

「あ、ありがとう。オサムは？」

「今、買ってくる」

オサムは立ち上がると、吸殻を灰皿に投げ込んで店内に入ってしまった。

僕は何となくその後姿を見つめながら、お茶のキャップを開けた。久しぶりに心地いい慣れ合いの会話を、自認する同性と交わした

気がした。

連休中は、昌美といるか、オサムといるかだった。それだけ、彼のさっぱりした性格が心地よかった。

連休中も部活がある時は、学校の近くで待ち合わせたりもした。

「亜希子は普段スカート履かないのか？」

「どうして？」

「いや、ジーパンばかりだから」

「スカート履いてほしい？」

「別に、どっちでもいいさ」

オサムはそう言っただけに、かんだ笑いを浮かべた。

彼といるのは、純粹に楽しかった。

どうか彼が僕に惚れてしまいませんかのように。ずっとこのまま、異性を感じさせない間柄でいられますように……僕は、初めてそんな願いを思ってみた。

第5話

梅雨入りにはまだ早かったが、この日、厚い雲からは一日中雨が降り注いでいた。

部活が無いと言うオサムと途中で落ち合い一緒に帰る。

昌美は図書委員の当番で、今日は居残りだ。

僕たちは大きな公園の中を横切って遊歩道を歩いていた。道なりに歩くよりも駅までの近道になる。前方には人影もあつたが距離はあつた。

オサムは少し強い力で、突然僕を遊歩道から押し出すと、木陰でキスをしようとした。

僕は慌てて傘を離して、両手で彼を防ぐ。

「駄目だよ」

「なんで？」

「どうしても、駄目なんだ……ごめん」

細い雨が僕の髪の毛と肩を濡らした。

「じゃあ、何で俺と帰ったり出かけたりするんだ」

「そんなの……オサムのサバサバしたところが心地いいから……」

オサムは腑に落ちない顔で僕を見つめていた。

僕は、濡れた前髪が額にへばり着くのを感じながら俯いて

「ごめん……いやなら、もういつしよには……」

「いや、いいよ。俺の方こそ勝手に思い込んでごめん」

オサムはそう言いながら、僕の傘を拾い上げて差し出した。

「あのさ……今まで通りの付き合いでいいの？」

僕はこの際二人の関係をはっきりさせておいた方がいいと思った。僕は絶対に男とキスは出来ないだろうし、その先なんて想像するのも怖い。

どれだけオサムと一緒にいても、彼の気持ちに伝える事は出来ない。

「うん。亜希子がそう言うんなら、それもいい」
オサムは、そう言って何時もの笑顔を見せた。
僕は、このまま友達でいられると思った。

陽射しは日に日に強さを増して、雲は白さを増してゆく。
僕の願いは叶わなかった。

オサムとあんな事があった後、僕たちは教室の外ではほとんど会わなくなった。

やっぱり少し気が引けた。

彼から見れば僕はどう見ても女なのだから仕方がないだろう。一度芽生えた気持ちを無理に消す事は出来ない。

オサムが僕の為に今まで通りを装っても、何処かで無理をしている、何処かで僕の身体を見ているのだと感じてしまう。

僕はこうして何時も、心の同性である男と関わる事ができなくなる。

どうして親しくするとみんな、自分に妙な気があると思い込んでしまうのだろう。

どうしてただの友達でいられないのか。

僕は、こんなに昌美を好きな気持ちを抑えながら、普通の友達としてうまくやっていると言っているのに。

どうして、あいつらにはそれが出来ないんだ……

そんなある時、昌美からメールが届いた。

『男Get!』

男？ 塚本先輩だろうか。

確かに昌美はモテるから、コクる勇氣さえあれば、きっとOKが出るかもしれない。

しかし、それは僕の予想とは全く別の出来事として現実に現れて

いた。

次の日、学校帰りに昌美は言った。

「ねえアツコ、オサムの事どう思う？」

「えっ？ オサムって、三浦オサム？」

「何かさ、アツコ、彼のこと好きなのかなあって」

「そんなわけ無いよ。何で？」

「ほんつとに、本当つに、何にも思ってない？」

「うん。全然。まったく」

昌美は、少し遠慮がちな笑みを溢しながら

「あたしさあ、昨日：オサムとエッチしちゃったんだ」

僕はこめかみに冷たい電気が走ったような気がして、血の気が引いていく思いだった。

確かに、クラスの男共は昌美と仲良くしたがる。

僕が意外に素っ気無い態度を取るのに比べて、昌美は聞き上手なところがあって、話していて楽しい部分もあるのだらう。

しかし、少しでも楽しい話題をネタに、彼女と距離を詰めようとしているのが見え見えで、それは昌美自身もわかっていただらう。

でもどうしてオサムと？ そんなに親しい感じも見受けられなかった彼と？

「そ、そう。どうだった？」

「そ、そんなの、初めてだったから判らないよ」

昌美は顔を紅潮させて大げさに笑って見せた。

僕は自分がどんな顔をしているのかも判らずに、ぼんやりと彼女の笑顔を見つめていた。

第6話

昌美は僕という以外は、オサムと一緒にいるらしい。

公にはしていないが、クラスの何人かは昌美とオサムが付き合っている噂しているのを耳にしている。

しかし、本人たちに誰かが冗談半分で訊いても、二人共否定を臭わせた笑みで受け流す。

僕の心は梅雨の到来と共に、そのどんよりとした雲行きのごとく重く沈んだものになっちゃった。

大切にしていたのに……僕は昌美が一番お気に入りだった。

それなのに他の男に食われてしまうなんて。

しかも、その相手がオサムだなんて。

彼女の白い身体の前では、僕が手の届く距離でずっと我慢していたのに。

僕にとってこれは、れっきとした失恋だった。

しかし、そんな事を引きずって何時までもブルーな月日を過ごしたくもない。

僕は入学当初から目をつけていたもう一人の女性、隣のクラスの若林サクラという娘に近づこうと試みた。

彼女はバレー部でリベロをこなしている。小柄な僕と身長差はほとんど無い。

「ねえ、現国の教科書貸してもらえないかな」

僕はサクラが廊下側の席にいる事を知っていた。

休み時間に何度か教室を覗いて、彼女が一人でいる瞬間を狙って声を掛けた。

「えっ、う、うん。いいけど」

彼女は何となく怪訝な表情をしていたが、快く教科書を貸してくれた。

これでキツカケは掴めた。

僕は現国の時間、二冊の教科書を前に、これからの作戦を考えていた。

「ありがとう、助かった」

昼休みに教科書を返しに行った僕は、彼女の机の所まで言って微笑んだ。

「あたし、三田村亜希子」

「知ってるよ、隣のクラスだもん」

彼女は僕の返した教科書を机にしまいながら

「それに、うちの男子も時々話ししてるよ」

「ええ、何か悪口とか？」

「違うよお、人気あるって事でしょ」

彼女はそう言って、僕の手をポンツと叩いた。

小さな白い手は、爪がきれいに切り揃えられていた。

「ねえ、お礼にお茶でもしようよ」

「ええっ？ なあんか男のナンパみたい」

「そうそう、よく言われる。義理堅いだけなのにサ」

僕はそう言って、女の子らしい笑みを作ると、彼女もつられるように笑った。

ランドムにシャギーを入れた黒い髪が、彼女の頬で踊っていた。

「いいよ。オゴリなら、喜んで」

彼女は自分の顎に人差し指を当てて

「でも部活があるからなあ……今週の金曜日なら」

「わかった、じゃあ金曜ね」

サクラに手を振って教室を出た。確かに、その様子を伺う何人かの男子生徒の視線を、僕はずっと感じていた。

僕は本来左利きだった。しかし、厳格な父と作法にうるさい母親が無理やり右利きに矯正したのだ。

「女の子が左利きだなんて、みつともない」

母は口癖のように言った。

「隣のひと、箸を持つ手がぶつかっちゃうでしょ。右手で持ちなさい」

小さい頃の僕は、食事の度に手を叩かれた。

「左で描く人がいますか！」

初めてクレヨンを手にした僕は、再び母親に叩かれる。

リビングテーブルに描いた落書きではなく、クレヨンを持つ手を叱られたのだ。

おかげで、今では字を書くのも、箸を持つのも右だが、やっぱり左利きは直らなかった。

しかし、自販機などのお金の投入口は必ずと言っていいほど機械の右端に在る。

左で小銭を持つ僕は、半歩横にずれないとお金が入れにくいのだ。ずっと意識せずに暮らしていたが、一度「左利きの不便さ」などと言うテレビ番組の特集を観て以来やたらと気になってしまう。

普段僕は当然のようにジーンパンを履くが、もちろん母親はよく思っていない。

家族で出かける時はよつぽどアウトドアなレジャーでない限り、スカートを履かせられる。

だから僕は、中学の頃からあまり家族で出かけるのは好きではないし、進んで出かけようとも思わなかった。

父親は大手ホテル会社に勤めている為時間が不規則で、それがせめてもの救いだ。

あの厳格な父親が、9時〜5時勤務だったらと思うと、僕はもっとグレまくって家には寄り付かなかったかもしれない。

母親は日本舞踊と華道を教える教室で先生をしている。
今時日本舞踊？　と思うが、意外と習いたがる娘が、いや習わせ
たがる親が多いと言っべきか。

「亜希子、ちよつと来なさい」

また始まった……今度はなんだろう。

学校から帰って部屋のベッドに寝転がった僕を呼ぶ声が、階下か
ら聞こえた。

僕は足音を立てないように階段を下りる。

「なあに」

「あんた、この傘どうしたの？」

母親が手にしているのは、最近元町の雑貨屋で買った、総柄でド
クロの絵が描かれた黒い傘だ。

「こんな傘どうするつもり？」

母親の顔は既に呆れかえっている。

「雨の日にさす」

「バカじゃないの。もう、こんな傘使わないでよ。ご近所に恥ずか
しいでしょ」

母親は、部屋にでもしまっておけと言わんばかりに、僕に傘を差
し出す。

僕は渋々それを手に、再び階段をあがった。

背中から、母親の大きな溜息が聞こえていた。

第7話（前書き）

これは、Dear Girlの続編に登場した真夕の後輩にあたる三田村亜希子が、横浜に住んでいた時のお話です。真夕の話と違い、あまり爽やかさは無く、少し生々しい描写もありますのでご了承下さい。

第7話

金曜日の放課後、僕はサクラと待ち合わせて校門を出た。

「今日は、自主連の日なんだ」

「帰っちゃっていいの？」

「ランニングだけしてきた。みんなそんな感じ」

彼女は笑いながら「ほら、大会終わったばかりだから」

高校総体は僕の知らないうちに始まり、知らないまま終わっていった。

そう言えば、応援がどうのって担任が言ってたっけ。

駅を一つ越えた所に結構有名なオープンカフェが在る。

僕たちはそこでケーキを食べながら、お茶をした。

「サクラって、彼氏いるの？」

「うん……いちおね」

「同じ学校？」

「ううん、Y工の人」

「めっちゃ硬派じゃん」

サクラは少し照れたようにクスツと笑って

「亜希子は？」

「いないよ」

「うそ……」

「ほんと」

「いくらでも寄ってくるでしょ？ 好みウルサインじゃないの？」

「少しね」

そう、僕の好みは普通と違う。女性だから。

……だって、それが僕にとっての異性なんだから。

「そうか、ウチの学校あんまりイケてる男は少ないからね」

「そうそう」

僕は大きく頷きながらケーキを突いた。

「バスケ部の塚本先輩は？」

「ああ、確かにマシだけど、面式ないから」

「亜希子も運動部に入ればいいのに。活発そうじゃん」

彼女は食べ終わったケーキの皿をテーブルの隅にどけて、オレンジダーズリンを口にした。

「ああ、規律がどうも面倒でさ」

僕が苦々しく笑うと、サクラは声を出して笑った。

「そんな感じする」

僕たちは駅で手を振って別れた。

今日はこんなもんでいいだろう。

帰り道、家の近くの駅でオサムに会った。彼もちょうど部活が終わって帰ってきた所らしい。

昌美とは会っていなかったのだろうか。

「よお」

軽く手を上げる彼に僕は

「今帰り？」

「うん。もうヘトヘト」

彼はそう言っただけで笑った。

何だか最近またサッパリとした笑顔が戻った気がする。

しかしそれは、きっと昌美で欲求を発散させているからに違いないと僕は思っていた。

だから、オサムがサッパリした笑顔を見せれば見せるほど、彼女とのセックスを思い浮かべてしまう。

僕は、彼との分かれ道まで来ると

「じゃあね」

そう言っただけで、急ぐように駆け出した。

* * *

初夏の陽差を浴びながら、汐風がそよぐ青空を僕はしばらくの間眺めていた。

指に挟んだタバコは、何時の間にか全て灰になってゾウの鼻みたいになっていた。

動いた拍子に灰は風に飛んで、フィルターだけが指の間に残った。後ろでは幼稚園児たちのはしゃぐ声が聞こえる。

遠足か、それとただの写生会なのか、みんな各々に写生板を持って、あるものは神妙に景色を眺め、あるものはただ奇声を発しながら走り回っている。

僕は一人で山下公園に来ていた。

昌美がオサムと付き合いだした今、気軽に誘う友達なんていない。僕が本物の女子高生なら、きっと街をぶらついて適当に声をかけたきた男と一緒に時間を潰して、ラブホなんかに入ったりするのだろうか。

しかし、僕にはそんな憂さ晴らしさえ出来ないのだ。

男でありながら女の身体をしている事を性同一性障害というそう。そんな連中が世の中には山ほどいるらしい。

その割に出会った事が無いのは、みんな僕と同じにその事実を隠しているからに過ぎないのだろう。

僕は図書館や書店を回って自分なりに調べてみた。

F t M - G I D …… 医学用語ではそう言うらしい。

女の身体で男心を持つ少女は以外に多いそうだが、完全な男性を性自認する例は少なく、男の身体で女性を性自認する M t F - G I D の方が圧倒的に多いのだそうだ。

ニューハーフは M t F - G I D なのだろうか？僕はそんな素朴な疑問を抱いたりする。

『性別違和感によるストレスで極端なケースでは、ペニスを切断するM t Fや、乳房を引き千切ろうとするF t Mも存在し………』

僕は気分が悪くなって、本を閉じた。

図書館にいた僕は、何だか息が苦しくなって急いで部屋を出ると、階段を駆け下りて建物の外へ出た。

梅雨の晴れ間の湿った熱い風に煽られながら、深く息を吸って近くのベンチに腰掛けた。

胸のム力つきを押さえるために、バージニアメンソールを口に咥えて火をつけた。

空に向かって煙を吐き出すと、太陽に照らされながら白く広がってあつという間に風に流れていった。

僕はそのまま電車に乗って桜木町まで来てしまった。

途中で昌美に電話しようと思って携帯を手にしたが、結局かけなかった。

公園の縁から揺らめく海面を覗き込むと、そこにはショートカットの少女の姿が波間に漂うように映っていた。
やっぱり僕はひとりだ……

第8話（前書き）

しつこいようですが、この作品は少し生々しい描写が入っております。ギリギリのところでもカシてはいますが……ご了承ください。

第8話

山下公園は何時でもカップルがイッパイだ。

岸壁に沿って点々と置かれたベンチは、それぞれが陣取って満席状態だった。

大人四人は座れるベンチだが、当然のように二人ずつしか座っていない。

「亜希子？」

何気なく通り過ぎたカップルの女性側が声を発した。

僕は、ただぼんやりと振り返った。

「あたし、洋子」

中学の同級生だった洋子。肌の白い大人しい娘。僕が初めて身体を交わした、あの洋子だった。

「どうしたの？」

僕はあまりの驚きで、逆に、あまりにもさりげない声で言った。

「デート。亜希子は……そう言えば横浜だったね」

洋子はそう言って、懐かしそうに微笑むと

「ねえ、一人？」

「う、うん」

僕は彼女の連れの男をチラリと盗み見た。

僕の視線を感じた彼は、少し離れた場所からほんの少しだけ頭を下げた。

黒髪の短髪は爽やか系だが、どう考えても高校生には見えない。

「この後暇？」

洋子は唐突に言った。

「はあ？ 特に予定なんて無いけど……」

洋子は彼氏のもとに駆け寄ると、何やら話をしている。

しばらくすると、男は何やらしょんぼりして、ひとり肩を落としながら公園から出て行った。

彼女は再び小走りに僕の傍に来ると

「これでゆつくりできる」

「彼氏、どうしたの？」

「今日は先に帰ってもらったよ」

「ええっ？ 大丈夫なの？」

「平気、平気」

彼女は中学の頃に比べると、ずいぶんハキハキしているように見えたが、白い肌と長い黒髪はあの頃と変わっていない。

洋子は彼氏と歩いていた。

男を相手にできるようになったのだ。

しかし、女性と身体を交えたい欲求は、変わっていないらしい。

「ここ、入れるかな？」

僕たちは、ラブホの前にいた。

「男同士は駄目だけど、女同士はたいい入れてくれるわ」

彼女が言った通り、僕たちはすんなり入ることが出来た。

洋子は以前にも誰かと女同士で入っているのだろうか。

彼女は、女性の身体とは久しぶりなのか、その行動は大胆で、激しかった。

もちろん僕も、誰かと身体を交えるのは久しぶりだ。

そう考えると、彼女は彼氏とは何時もシテいるのだ。

何時の間にか、僕よりも経験豊富になっていると言う事だろうか。

部屋の自販機でオモチャを買った。

「こ、こんなの入るかな……」

「大丈夫だよ。あたし、もっと大きいの持ってるよ」

洋子はそう言って、しなやかな指でコンドームをそれに被せた。

この日は、常に洋子がリードしてきた。

彼女は男と交えた経験を着実に積み上げて、それをふんだんに生かしてきた。

オモチヤの奇妙な振動音が、二人の吐息に挟まれるように鳴り続けた。

二人の身体が同時に痙攣して、ベッドに倒れた。

「洋子は男でも女でもデキルんだね」

「本当は、こうしているのが一番心地いい」

洋子は、少し気だるい笑顔をして

「でも、男にされるのもけっこういいよ」

僕は何も言わずに、ただ笑みを返しただけだった。

外へ出ると、紺青の空に月が浮かんでいた。

雲に紛れてぼんやりと朧げなその光りは、街の灯に掻き消されていた。

僕たちは桜木町の駅で手を振って別れた。

メルアドを交換したが、再び彼女に会う事は無いような気がする。人混みの喧騒に消えてゆく洋子の細い背中を見ながら、僕はそう思った。

第9話（前書き）

すみません…エツチな場面続きます。亜希子の性格を強調させる為ですのでご了承ください。

第9話

部活と彼氏に忙しいサクラだったが、着実に僕たちは親しくなつて距離を近づけていった。

もちろん彼女は僕に同性として親しみを感じているが、僕は彼女を異性として感じている。

親しさが増せばその想いは自然と膨れ上がり、サクラの身体に触れたい気持ちも増す。

洋子と再会した事が、それに拍車をかけたのも確かだった。

期末試験が終わって学校が休みに入ると、一緒にいる時間はさらに増えていった。

その日は朝から暑い日だった。遠くに立ち上る入道雲以外、頭上にはまっさらな青い虚空が広がっているだけだ。

「ねえ、外は暑いしさ、ウチに遊びに来ない？」

僕は部活が午前中だけだと言うサクラの携帯に電話した。

「うん。じゃあ。帰りに寄るよ」

「今どこ？」

「これから電車。20分くらいで着くかな？」

「そうだね。じゃあ」

しばらくすると、家のチャイムが鳴った。

サクラは、下はジャージで上はTシャツという、いかにも部活の帰りといった姿だった。

部活用のボストンバックを肩にかけて玄関前に立っていた。

「入って」

「お邪魔しまああす」

直接僕の部屋に通して、氷の入ったジュースを差し出す。

彼女は炭酸飲料が飲めないらしい。

「今日はすごい暑いよ。マジ死にそうだった」

サクラはそう言いながら、ジュースを飲んで息をついた。

屋内で行うバレーボール部のサクラだが、部活の行き帰りだけで顔や腕は真っ黒に日焼けしていた。

少しの間映画やテレビドラマの話などをしていると、彼女も完全にリラックスしてベッドに寄りかかりながら床に脚を投げ出している。

僕はサクラの直ぐ横に身体をずらして座りなおすと、彼女の身体に自分の身体を触れさせた。

「なにになに、何でそんなくつつくの？」

冷房の効いた部屋は、涼しくて心地よかった。

彼女の体臭が、心地よく僕の鼻孔を刺激した。

僕は一気に彼女を押し倒す。

サクラは呆気にと取られて床に身体を横たえた。

「キャハハハ、なにになに」

彼女は冗談か何かの遊びだと思ったらしい。

僕は彼女の胸では無く、股間に手を当てた。

その瞬間彼女は身体を硬直させて強く両脚を閉じた。

「ちよつと、やめて」

僕は一気に彼女の股間を攻めあげた。

サクラは身をよじつてもがくが、押しのける手には力が入らないようだった。

ジャージの上からでも彼女の股間が熱く湿っているのが判った。

外の暑さでかいた汗が、まだ残っていたのかもしれない。

サクラは吐息を漏らしながらも抵抗を続けた。

引き締まった太ももの力は強く、僕の手を痛いほどに挟み込んだ。僕は執拗に股間だけに集中して、彼女の身体が完全に火照っているのを待った。

僕の左手を掴んだ彼女の握力は殆ど無かった。

観念したのか、気持ちよくなったのか、サクラの身体の力が抜け

ていくのを見計らってキスをした。

日に焼けた頬が朱色に染まって、目の力も失っていた。

彼女は唾液をいっぴいたらしながら僕と唇を交えた。

シャージの中に手を入れて、下着の中に滑り込ませた僕の指先には、ねっとりとした汗とは違う分泌液が纏わりついた。

サクラの呼吸はどんどん荒くなって、今にも声が出そうなのを押し殺している。

もがいているうちに捲れ上がったＴシャツのからは、日焼けしていない白いお腹が見えていた。

もう少ししたら服を脱がせようと思っていた。

しかし、彼女は突然最後の力をふり絞るかのように、僕の頬を思い切り強い力で叩いた。

パンツという激しい音と共に、僕は床に転がった。

「いい加減にしてよ」

僕の動きが止まった隙に、彼女は素早く起き上がると火照った顔で睨んだ。

「あんたおかしいんじゃないの？ レズなの？」

サクラは自分のバックを手にして

「キモイよ。ヘンタイ！ もう、声かけないでよね」

そう言っただけで部屋を出て行った。

凄く勢いで階段を駆け下る音がした。

僕はそのまま部屋の中に横になった。

「やっぱりうまくいかないなあ……」

そう呟きながらも、サクラの身体の濡れた感触を思い出していた。窓の外に広がる青かった空が、何時の間にか緋色に変わりはじめていた。

第10話

正式な夏休みに入ると、再び昌美と一緒に時間が増えた。

オサムが部活の合宿に行った為だ。その後も、練習試合が重なって、お盆まではあまり遊べないと嘆いていた。

「バイトでもしようかなあ」

突然昌美が呟いた。

「バイト？」

「うん。遊びたいけど、お金ないじゃん」

そうか、バイトか。交友関係も広がるし、学校が違えばサクラのようにうまくいかない時でもまったく支障がない。

まあ、サクラも自分がされた事、少しでも快感に溺れた事を誰かに言つとも思えないが……

「いいね、バイト」

僕が昌美に賛同すると、早速二人で無料求人誌などをあさって、いいところを探した。

昌美は制服がかわいいと言って、街道沿いのファミレスでバイトを始めた。

僕はあんなエプロンドレスのような服を着るのはムリなので、もっと渋めの仕事を探す。

しかし、傍目にはただの女子高生。そんな渋めの仕事など存在はせず無く、しかも既に夏休みに入っていた為、条件のいいバイトはなくなっている。

結局近所のコンビニで働く事にした。

近所と言っても、一番近い場所はオサムも来るので、とりあえず3番目に近い場所にした。駅からは少し離れているが自転車で直ぐ

だ。

昼間はパートさんがいるとの事で、結局夕方から夜の時間帯になつてしまったが、同じ時間帯には二人の高校生が同じようにシフトに入っていた。

もう一人、高校生の男がいるが、これは眼中には無い。

一人は新横浜の高校に通う恵美子。

背は僕とあまり変わらないが、何だか胸がデカイ。夏休みだからなのか金髪に近い長い髪の毛は、サイドがクネクネと巻いてある。

もう何度もプールに行っているらしく、肌は小麦色に焼けていた。それでもこんな所で地道に働く彼女は、見かけによらず真面目だ。もう一人はミッション系の名門校に通う未穂。

黒髪のストレートは昌美に似ている。背丈も僕より高く、ちょうど昌美くらいだろうか。

白い肌はこの季節、日焼け止めを欠かせないそうだ。

もちろん学校には内緒でバイトをしているラシイ。

「入荷したお弁当を検品してここに並べて、古いものを全部どけるの」

5ヶ月先輩の未穂は、丁寧に仕事を教えてくれる。

客が途切れる事は殆ど無く、四六時中やる事があるので意外と忙しい。

「どう？ バイト慣れた？」

夜には毎晩昌美から電話が来る。彼女もバイト先での事を聞いてほしいのだろう。

「ずいぶん慣れたけど、何だか毎日同じ事ばかり」

「しょうがないよ、それが仕事だもん」

「昌美はどう？」

「なんかさ、ナンパしてくる客がいんの」

「あああ、いるいる、コンビニでも」

僕はバイトに入って一週間、3回もレジの所でナンパされた。恵美子と未穂はもう慣れてる様子で、軽く受け流す。

僕は一応お客だと思って邪険にはいけないと余計な気をつかい、時間ばかり取られてしまう。

「適当に笑って流すけどね」

昌美はそう言って、フフツと鼻で笑った。

愛想がいい割に、意外とキツパリしている彼女が少し羨ましかった。

梅雨が明けてからはさらに暑い日が続いていた。

駅周辺の並木からは、セミの声がしきりに聞こえていた。

僕は、バイト時間までの退屈をしのぐ為に、ブラブラして過ごす。

「チヨト、アナタ。スミマセン」

変な日本語が、僕を呼び止めた。

「アナタ、カワイイ。ワタシ、メチャ、コマテマス」

「はあ？」

「ワタシ、コマテマス。コンタクトオトシマシタ。コンタクト、メ

チャタカイ。ワタシモウ、カエナイ」

それは、長い黒髪の東洋人だった。韓国か、中国か僕には判らないが、その辺の人だろう。

薄いファンデに、アイメイク。オレンジ系の淡いリップ。

言葉を読さなければ一瞬日本人と見間違っただが、清楚な瞳は、何だかこの国の人には無いような気がした。

僕は思わず立ち止まって、彼女の話聞いてしまった。

辺りを見渡すが、日中の駅は、意外と人が少ない。

「コンタクト、落したんですか？」

「ソウデス、ワタシ、ズト、サガシテマス」

こんな所でコンタクト落したら、見つからないよ……

「イツシヨニ、オネガイシマス。アナタ、メチャ、カワイイ」

僕は何だか彼女のあまりにも必死な呼びかけに、形だけでも探してあげなければという思いに駆られて、一緒にかがみこんだ。

駅前の石畳の上を、じつと目を凝らして見つめる。

……ムリだろう……僕は、密かに溜息をついた。

しかし、チラリと見た彼女の姿は、かなり本気モードだ。時々通り過ぎる人が、怪訝な顔で僕たちを盗み見て行く。

なんで、僕だけ捕まっちゃたかな……

「もう、誰かに踏まれたんじゃない？」

僕が呟くように言った言葉に、彼女の反応は無かった。

ひたすら地面を舐めるように見つめている。

彼女はマジで探す気だ。

僕は、何処まで付き合えばいいのか、そればかり考えていた。首に刺さるような陽差が、やたらと暑かった。

第11話

僕は、東洋の外人女性に呼び止められて、落したコンタクトを探していた。

こんな所で落したコンタクトレンズが見つかるはずがない。

身体をかがめてはいたが、何時この場から離脱するかばかり考えていた。

しかし、ふと見たレンガの石畳。

レンガの継ぎ目の灰色のコンクリート部分には、僅かなひび割れを掻き分けるように丈

の短い雑草がツンツンと生えている。

その隙間で、一瞬キラリと何かが太陽光に反射した。

ハツとして、僕は顔を近づけた。

「これじゃない？」

僕は彼女を呼んで、それを指差す。

彼女は目を凝らし、地面に這い蹲るようにして顔を近づける。

「コレデス。コレデス」

喜びで、彼女の声は踊っていた。

そっとコンタクトを拾い上げた彼女は

「アナタ、スゴイ。メチャ、スゴイジャン」

僕は、へんてこりんな日本語で褒められて、ただ笑みを返すだけだった。

彼女の名前は、ユン・ヨンジエ。韓国から横浜の大学へ来た留学生だそうだ。

コンタクトを着けて見開いた目は、さっきよりも大きく見えて、少しふつくらとした卵型の顔は、今時の女子大生に引けを取らない。僕は彼女がお礼をしたいと言うので、渋々ながら駅前のドトール

でお茶をご馳走になっていた。

「アナタ、コウコウ？ チュウガク？」

「こ、高校生だよ」

「ナマエ、ナニ？」

「あ、亜希子」

「アキコデスカ。アキコカワイイ」

ダイレクトな褒め言葉に、僕はただ笑みを返してコーヒーを飲んだ。

「ニホンノコウコウセイ、メチャカワイイヨ。ワタシ、スゴイベンキョウナル」

そう言いながら笑って、彼女もコーヒーを口にした。

「トモダチ、タズネタラ、ルスデシタヨ」

彼女は、大学の友達を訪ねて来たが、留守で帰る所だったと言う。

「ケイタイ、ナラセナイ」

「携帯？ 鳴らせない？」

「デンワ、ナレナイ」

どうやら、友達の携帯電話が繋がらなくて、心配で訪ねて来たらしい。

そんな身の上話をされても、はつきり言って困る。

しかも、めちやくちゃ聴き取りづらい日本語……

「あの……あたし、そろそろバイト行かないと」

僕は、早くこの場から抜け出したかった。

「バイト？ アキコ、ハタライテマスカ？」

僕は、とりあえず数回、大きく頷いた。

「アキコ、イイヒト。カワイクテ、イイヒト」

彼女は手を差し出した。

僕は一瞬何だか判らなかったが、どうやら握手のようだと理解して自分の右手を差し出すと、彼女は強く握って

「アリガトウ、アリガトウ、ゴザイマッス。ヨコハマ、イイヒトイッパイ」

イッパイって……きつと何人かに声をかけて、手伝ったのは僕だけだ。

でも、彼女のその手は、何だかとても暖かい気がした。そして、その笑顔はとても素朴で素敵なものだった。それは、彼女が心から僕にお礼を言っているからなのだろう。

彼女はこの国に一人で留学してきたのだろうか。

孤独ではないのだろうか……

僕はそんな事を考えながら、駅の改札口に入っていくヨンジェを見送った。

2週間もするとバイトにもすっかり慣れて、その日僕はバイトの時間まで未穂と一緒に買い物をしたりして過ごした。

この後バイトがあるので、未穂もジーンズを履いていたが、何だか丈の短いキャミが腰のクビレを強調していかにも女らしい。

ジーンズがローライズのせいもあるのだろうか。

それとも、肩に見える見せブラのヒモのせいか。

僕は、ラフに履ける古着ジーンズを好み、もしキャミソールなんて着ても、その上に絶対Tシャツを着ないと落ち着かない。

彼女の白い頬は、ファンデーションなんて無用だった。それでも日焼け防止に薄く塗るそうだ。

そう言えば、ヨンジェも白い肌をしてたっけ。

僕は、不意にあのへんてこな日本語を使う彼女を思い出した。

「ねえ、亜希子は何でバイト始めたの？」

サクラとも入ったオープンカフェで、ケーキを突きながら未穂が言った。

「ううん、まあ、何となく」

まさか、女の子と知り合う為とも言えない。

僕は笑って誤魔化した。

「未穂は？」

「あたしは自由になるお金が欲しいから」

「お小遣い貰ってないの？」

「貰ってるけど、何に使ったか手帳に記入して親に見せないといけないのよ」

「ひええ、会社の経費みたいだね」

「そうそう、そんな感じ」

未穂は僕の応えに思わず笑った。

黒い髪がサラサラと風に揺れて頬にかかる、それを左の小指で直す仕草が妙に色っぽい。

ミッシヨン系の学校だからなのか、その仕草のひとつひとつが何だか女らしくて、僕はいちいち観察してしまう。

母親はこんな風に僕を育てたのだと、ようやく判った気がした。

第12話

昼間は少々時間を持て余す事もあるが、僕は夕方からのバイトの時間が好きだった。

やる事があると言うのは、何だか自分の存在価値が明らかになつて心強い。

陽が暮れてから何処かへ行く高校生カップルもたくさんコンビニには訪れる。

レジ前でいちやついて、なかなかお金を払わない連中だとか、やる気満々でスキンを買っていく連中。

クラブにでも繰り出すのか、やたらと肌を露出して目の周りを真っ黒にした同年代の集団。

僕は、客と店員というガラスで仕切られたこちら側から、そういった連中を眺めて少しだけ楽しむ。

「亜希子は、お盆中どうするの？」

もうすぐバイト時間が終わる頃、恵美子が訊いてきた。

「どうするって？」

「パートさんとか結構休みとるから、あたしたちも朝から駆け出されるよ」

「そう言えば、入るとき聞いたような……」

しかも、僕が入った時にいた高校生の男は、商品のタバコを盗んでいたのがばれてクビになった。

「あたしは出れるだけ出るよ」

カップめんの棚を整理していた末穂が言った。

店内には三人のお客がうろついている。

「あたしは、半分だけ出る。友達とプール行くから」

恵美子は海やプールが大好きなようだ。

「あたしも全部出るよ。別に予定ないし」

僕は、宅配便の伝票を整理していた。

「あんたたち、彼氏とかいないの？」

恵美子は僕と未穂を見比べるように眺めて言った。

しかしその時、恵美子の視線は未穂を通り越してその向こうに止まった。

「あつ」

「何？」

僕が彼女に訊くと、恵美子は声を潜めて

「あの帽子の男、今万引きした」

「うそ」

「マジだよ。あたし見たもん」

そう言っている間に、ヤンキースの帽子を深めに被った男は、店の出口へ向かっていた。

「何取った？」

「わかんないよ。電池か何か。あの辺のモノ」

恵美子が小さく指差して言ったのを聞きながら、僕はカウンターを出て男が出て行く後を追って外にでた。

「すいません。ちよつといいですか？」

僕は小走りに近づいて男の肩に触れた。

男は思い切り僕の手を振り払って走り出した。

「ちよつと！」

僕は負けずに追いかけた。

そこはまだコンビニの敷地駐車場内だった。

再び背中に触れるが捕まえ損ねた。

その時歩道から自転車が走ってきて、男とぶつかった。駐車場と歩道の間に転げた男を僕はすかさず押さえる。

倒れた自転車の人に構う余裕は無かった。

「何で逃げるんだよ！ 万引きしただろっ」

「うるせえ、離せ！」

男は勢いよく僕を突き飛ばした。僕はアスファルトの上に軽々と転げた。

……クソッ、逃がしてたまるか。

僕は直ぐに起き上がって、再び男に掴みかかろうとした。

しかしその時、自転車で万引き犯とぶつかった人物が、男の腕を掴んだ。

「すいません。ちょっと来て貰えますか」

それはコンビニの店長だった。彼の父親がこのオーナーでもある。

あまりパツとしない普通の中年だが、この時ばかりは少しだけ頼もしく見えた。

「何だよ、濡れ衣だ！」

男が虚勢を張っていると、店から恵美子が駆け出して来て、男が持っていたリュックに手をつ突っ込んだ。

「あたし見てたんだからね。女の店員だと思ってなめんなよ」

恵美子が男のリュックから取り出したのは、携帯電話用の充電電池だった。

* * * *

間も無く、入れ替えの大学生のバイト二人と交代して、僕たちは上がりとなった。

「びっくりしたね」

帰り際、一緒に裏口を出た恵美子が言った。

「うん。万引き捕まえたの初めて。超焦った」

「あたしは、亜希子の無鉄砲さにびっくりしたけど」

未穂がそう言って笑った。

恵美子も思い出したように

「そう言えば、バイトだけの時は、ああいう時追いかけたりするな
って言われてたじゃん」

「そうだっけ？」

「刺されたりしたら、しゃれになんないよ」

僕はその言葉を聞いて、急に怖くなった。

ただ逃げるだけの犯人で助かったと思った。

「じゃあね」

「お疲れ様」

「またね」

3人は自転車に乗ると、別々の方向に散って行った。

僕は恵美子や未穂と一緒にいるうちに、当初の目的をすっかり忘れていた。

なんだか二人共一緒にいると楽しくて心地いい。

この関係をあえて壊したくはなかった。

その為には下手な感情は抱かずに、女同士として付き合っていく方がいいのかもしれない。

今の僕は孤独ではなかった。

昌美は時々メールや電話をよこすし、殆ど毎日恵美子や未穂と顔を合わせている。

何処に属したらいいのか判らない学校とは違って、向き合う人物が決まっているからストレスを受けないのだろうか。

学校のようなあまりにも大勢の集団生活が、僕にストレスを与えているのかもしれない。

第13話

バイトの帰り道、僕は何となく昌美に会いたくなって、そのまま自転車をこいで彼女が勤めるファミレスまで行った。

ちょうど着く頃には、彼女もバイトの上がりの時間のはずだ。歩道を走り抜けてファミレスに到着した時、建物の裏に人影が見えた。

昌美かもしれない。

僕は駐車場で自転車を降りると、裏手に回って、彼女だったら驚かしてやろうと思った。

しかし、確かに昌美はいたが、そこにはオサムの姿もあった。おそらく彼が迎えに来たのだろう。

二人は、裏口を出た暗がりの中で抱き合い、キスをしていた。

僕は急いで後ずさりして、壁の陰に隠れた。

二人はキスに夢中で、僕の気配に全く気づいてはいなかった。角からそっと覗くと、二人はまだキスをしている。

昌美の生々しいキスの姿に、僕は堪え切れない何かが沸き起こり、頭の中でザワザワとうごめくを感じた。

僕は物音を立てないようにきびずを返して駐車場に出ると、そのまま自転車で乗って走り出した。

当たり前だ。二人は付き合ってるんだから。

男と女なんだから。

何もおかしくはない。

僕は自分にそう言い聞かせて、頭の中のザワめきを吹き飛ばした。

ペダルをこぎっぱなしで家の近所まで来た時、小さな公園の前で自転車を止めた。

僕は荒げた呼吸を整えるように大きく息をしながら、公園のベンチに腰掛けた。

ポツリと一つだけある小さな街灯が、辺りをほの暗く照らしている。

キスをする昌美の顔が脳裏に焼きついてた。

彼女はあるなにイヤラシイ顔ができるのだ……

僕は、小さな鞆からタバコを取り出して火をつけた。

大きく吸い上げると、何時もよりハツカの味が強く感じた。

* * *

青く輝く水面は遥か彼方へ続いて、ナイフで切ったように一本の線となつて終わっていた。

そこには、陽炎に包まれた作り物の黄色いクジラが、湧き出たような入道雲を背景に浮かんでいる。

「気持ちいい。あれなんだろう」

恵美子が沖を指差して言った。

「クジラじゃないの？」

未穂がその先をじつと見つめている。

「なあんか、デカくない？」

僕と未穂は、恵美子に誘われて三浦海岸まで来た。

お盆前に店長に無理を言つて、3人で休みを貰ったのだ。

交渉した恵美子はお盆も半分は休むのだが、特に罪悪感はないらしい……

「未穂、なんで帽子被ってるの？」

未穂は水着になつても、ストローハットを被っている。

黒いワンピースの水着から出た、すらりと白い足が眩しい。

「あたし、焼くと赤くなつて大変なのよ」

日焼け止めのクリームも、何度も塗っている。

「ふうん」

そう言う恵美子は、ピンクのビキニが映える小麦色の肌を露にして、サンオイルなどを塗っている。

「ちよっと、なんで水着にならないの？」

恵美子がショートパンツを履いたままの僕に言った。

「なってるじゃん」

僕はセパレートの水着の上に、下はショートパンツ、上は半袖シヤツを羽織っている。

「全部脱ぎなよ。そんな痩せてるんだから、いいでしょ」

恵美子は僕のウエストを見て言った。

「海に入るときは脱ぐよ」

「何だか、二人共変だよ」

恵美子は、僕と未穂を不満げに見つめた。

何だかんだ言っても、海は気持ちよかった。
埼玉県に住んでいた僕は、プールばかりで、殆ど海へ来た事が無い。

水はきれいだし、時々魚も見かける。

「あ、魚だ」

「うそ、何処何処？」

僕が見つけて恵美子に教えたと、彼女は膝下くらいの海面を必死で追い回していた。

「捕ままないね」

「そりゃ、ムリだよ」

そんな僕と恵美子を、未穂は砂浜から見ていた。

海は嫌いじゃないらしいが、日焼けするのがとにかく嫌なのだそうだ。

少しの間、帽子を被ったまま水に入っていたが、一人先に上がっていくと、肩にバスタオルをかけてビーチマットに腰掛けている。
未穂の希望でレンタルしたビーチパラソルは、いかにも彼女専用

だ。

恵美子が持つてきた大きなフロートに掴まって、僕たちは遊泳区域の一番沖まで行った。

仰向けになって海原に身を委ねると、青い空が揺れていた。

身体を包む水音だけが、僕の世界を浸食した。

「亜希子、大変だ。ここ足着かないよ」

恵美子が急に声を上げた。

浮力に任せてここまで来た彼女は、今頃それに気づいたらしい。

「これに掴まったら大丈夫だよ」

平然としている僕に、恵美子は急に不安な顔をして

「早くもどろろ」

確かに、砂浜はだいぶ遠くに見えて、未穂が何処にいるのかもわからなかった。

ビーチパラソルの花が咲きに乱れて、うごめく人は蟻んこのように小さく見えた。

第14話

「熱っ、熱っ！」

砂浜に駆け上がった恵美子はピョンピョン飛び跳ねるようにして、再び波打ち際に戻って来た。

水際で未穂を捜して辺りを眺める僕に、彼女は

「熱くて砂浜歩けないよ」

「水際歩けば大丈夫だよ」

「ああ、なるほど。亜希子賢い」

恵美子はそう言って笑うと

「ところで、未穂は何処？」

僕は人の溢れかえる砂浜を見渡していた。

「あの、監視塔の近くじゃなかった？」

「あ、そうそう。うわ、メチャ遠いじゃん……」

恵美子は僕の指差した先を見ると、そう言ってクビをうなだれた。

「ずいぶん流されたみたい」

僕と恵美子はテクテクと水際を歩き出した。

「ねえねえ、二人で来たの？」

後ろから男の声がした。

振り返ると、自信満々の笑みを浮かべた、ロン毛のサーファー系が二人。

「俺らと遊ばない」

「あたし、喉かわいたなあ」

恵美子が笑顔で返した。

ナンパ男の視線は、恵美子の豊満な胸をチラ見していた。

「マジ？俺らいくらでも飲み物持つてるよ。BOX持参だからバリ飲みOKだよ」

「ほんとにいい」

恵美子の笑顔は何処か本気っぽく見えた。

おいおい、まさか付いて行く気じゃ……

「あたしら、グループで来てるから戻らないと」

僕は男たちにそう言って、恵美子の腕を引っ張った。

「ナニ、女だけのグループ？」

意外としつこい。

僕は不意に目に飛び込んだ、上半身に日本画の描かれた人を指差した。

ビーチパラソルの下に雀卓を置いて、麻雀をしている。

「あそこ、あたしたちのツレ」

ナンパ男は視線を移してから、そそくさと後ずさりをして

「ああ、そうなんだ。じゃあ……邪魔しちゃうルイね」

そう言って笑った顔は、二人とも引き攣っていた。

「あ、いたいた」

僕と恵美子が砂浜を歩きながら未穂に声をかける。

「あら、何処から来たの？」

「沖まで行ったら、潮に流されたみたいでさ」

僕の言葉が終わらないうちに

「亜希子がやたら沖まで行くから疲れたよ。タダ呑みも逃がしちゃったし」

恵美子が、そう言いながら未穂の隣にドカツと腰を下ろした。

僕たちは無事に沖から戻ったものの、着いた砂浜は全く知らない景色で、目印の監視塔を頼りにだいぶ砂浜を歩いて来たのだった。

「亜希子、のど渴いたあ」

「もう……」

僕は上着からお金を取り出して、海の家に歩き出した。

「あ、あたしも行く」

未穂も立ち上がると

「じゃあ、あたし荷物番ね」

恵美子はそう言っ、大きなフロートをマットにして寝転がった。

砂浜で受ける真夏の太陽は、昌美の事を忘れさせてくれた。

熱い砂浜と海水には殺菌作用があると聞いた事がある。

心の殺菌作用もあるのかもしれない。

暑い砂浜に散りばめられた、色とりどりの華やかな景色と、恵美子と未穂の肌の香りが、今だけを楽しませてくれた。

もちろん、僕の身体からも彼女達同様に、女の香りが出ていたのだろうか……

帰りの満員電車は、海の疲れにいつそう拍車をかけた。

恵美子は僕に寄りかかって立ったまま眠かきをしていた為、膝がカクンツと折れる度に、何度も僕にしがみついた。

僕は彼女を抱きかかえるように支えながら、その無防備な所が何だかとても可愛く感じた。

未穂はほんのちよっぴり赤く焼けた頬を、しきりに気にしていた。家にたどり着いた僕は、自分の部屋に入ってあっという間に寝入ってしまった。

夕飯は食べた記憶がない。

翌朝目を覚ますと、顔がヒリヒリした。

第15話

接近していた大型台風は、日本海にそれて消えてしまった。

お盆中、僕は毎日朝からバイトへ出かけた。

その時に見る青い空と大きな入道雲は、夕方のそれとはまったく違っていた。

去年の今頃は、何をしていたのか記憶が定かでない。

女の子ばかりを追いかけていたのだろうか。

お盆中のコンビニは意外と暇だった。

帰郷や旅行で出かける人がそれほどに多いのだろうか。

お昼を買いに来るビジネスマンも異常に少なく、子連れの主婦の方が多い。

大きな窓からは、白い陽差が降り注いで、日中にお店にいるのも何だか新鮮だった。

時間外の休憩がもらえたり、アイスをご馳走してくれたり、出ずっぱりの僕たちに、店長もそれなりに気を使っているようだった。

「新横のホテルでパーティーあるんだけど、行かない？」

お盆明け、バイトに行くと二日ぶりに会った恵美子がそう言っ
て声をかけてきた。

「ホテルでパーティーって、何だかアヤシイよね」

横で聞いていた末穂が、訝しげに言った。

「どうせあんたは来られないでしょ」

恵美子は末穂に向かって言うと

「それに、変なクスリとか無しだよ」

「ほんとに？」

僕も末穂と同じく、怪しげなイメージを感じていた。

「あたしだって、やばい事はやだもん。て言うか、あたしそんな悪い付き合いの友達いないよ」

僕は、タダ券がもつたいないという恵美子に押されて、パーティへ行く事にした。

新横浜の駅を出ると、大通りが真っ直ぐ伸びて街路灯が何処までも続いていた。

「どうして、未穂は来れないの？」

「バカね。彼女のウチがこんな夜遊び許してくれるわけ無いでしょ」

「ああ、そっか」

未穂はしっかり者だから、こんな時いてくれたら心強いと思った。

駅から見えていたデカイホテル。まさかとは思ったが、恵美子に向かっていたのはそのホテルだった。

一階には大きな喫茶店やレストランが入っていて、道路沿いの巨大なガラス窓に煌々と明かりが灯っていた。

ピカピカのガラス張りの自動ドアを抜けて、広いロビーの横を通ってエレベーターに乗る。

夜遅いせいか、他には誰も乗っていない。

「ちよつと、本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ。亜希子って意外と未穂側に近いのかもね」

恵美子はそんな事を言って笑った。

壁で仕切られた狭い空間に、彼女の笑い声が響きわたる。

やたらと数の多い階数表示のボタンランプが、次々と上へ向かって順に光ってゆく。

恵美子の押した33階まで止まることは無かった。

エレベーターを降りて、会場に使われる部屋へ真っ直ぐ進む。

「乱交パーティーって事は無いよね」

僕は不安を隠しきれずに、再び恵美子に訊く。

「バカねえ、そんなわけなっしょ。亜希子、雑誌の見すぎだよ」

彼女はそう言っ、僕の手を掴んで部屋のドアを開けた。

溢れ出るように音楽が聞こえてきた。

スイートなのか、その部屋はやたらと広かった。二部屋に分かれていて、手前の部屋には小さなキッチンとバーカウンターまで付いている。

奥の部屋のそのまた奥がベッドルームになっているようだが、そこはドアで仕切られていた。

部屋の中には20人以上の男女がグラスを片手に楽しんでいる。ホテルで貸し出しでもしているのか、立食用のテーブルが3つ置いてあった。

照明はかなり落ちてあつて、まるで何処かのクラブのようだ。

ヒップホップ系の洋楽が、大きな音で部屋中に流れていた。

「おお、エミ来たんだな」

近くにいた男が声をかけてきた。

「久しぶり。この娘、友達の亜希子。よろしくね」

恵美子に紹介されて、僕は軽く頭をさげた。

「俺、シュウジ。よろしく」

シュウジは大学生らしいが、よく観ると、部屋の中には僕たち以外にも高校生らしき人たちが混ざっていた。

恵美子は「一通り声かけてくるから」と言っ、僕を残して歩き回っていた。

何処から持つてきたのか、部屋の中央には卓上式のプラネタリウムが置いてあり、天井に星空を映し出している。

昔で言っ、ミラーボールの代わりだろうか。

入り口に目を止めると、僕たちの後にも何人か入って来るのが見えた。

それぞれに声を掛け合い、笑い合っている。

僕は天井に映る北斗七星を眺めながら、ソフトドリンクを手にし

て
い
た。

第16話

「あれ、酒飲まないの？」

横を見ると、誰かが話しかけている。

「えっ？」

「それ、酒じゃないだろ」

やはり、僕に話しかけているのだ。

「う、うん」

「飲めないの？」

「あんまり」

僕がそう言うと、男は小さく声を出して笑った。

大音量の音楽で、その声は聞こえなかった。

「酒飲まないのにここに来るなんて、変わってるね」

「ああ、あたし友達に連れてこられて」

僕がそう言うと、男は再び笑った。今度は少しだけ笑い声が聞こえた。

「こんな事、しょっちゅうやってるの？」

「いや、2ヶ月に一度くらいかな。でも、今月は二度目だけだね」

笑うとできる目尻のシワが、人懐っこさをもじだして、少し長めの髪もナンパ臭さは無かった。

ラフに着た白いシャツが清潔感を出しているのだろうか。

グラスを持つ手には、プラチナのブレスとエクスプローラがチラついていたが、それも嫌味は無い。

「またすぐ新しい娘引っ掛けて」

反対側から声がして振り返ると、今度は女性だった。

胸の大きく開いた山吹色のワンピースの上に、シースルーのカーデガンを羽織っていた。

照明の落ちた中でも、濃いマスカラと赤い唇が目立っている。

「そんなんじゃないって」

「はいはい。洋介は優しいからね」

「お前、もう酔ってんのか？」

男はすかさず言い返した。

僕は首を左右に振りながら、二人の会話を聞いていた。

そんな僕に気づいた男は

「ああ、ごめん。俺、洋介。そいつはエナ」

「そいつって、何よ」

エナは洋介をキツと睨むと、僕に向かって微笑み

「よろしくね」

小鼻の小さい、何処か上品な笑顔が注がれた。

洋介もエナも大学生なのだそうだ。

僕が彼らとしばらく会話を交わしていると、恵美子が戻ってきた。

「あれ、洋介も来てたの？」

「ああ、まあね」

「大丈夫なの？ 飲んだりして」

「一応ひかえてはいるよ」

「そうそう、恵美子からも言っちゃってよ」

相変わらずエナは洋介にきつかった。

恵美子は普段どんな付き合いでこの人たちと知り合っただろうか。

僕はとても不思議に思った。

それでも、初めて年上の人たちと話してみて、何だか楽しい気分だった。

ここへ来て1時間以上が経った頃、僕は部屋を出てトイレに行った。

恵美子にトイレの場所を聞くと、女性は部屋の外へ出てこの階にあるロビーの近くのを使った方がいいと言われたからだ。

部屋の賑わいが別世界のように、廊下は静まり返っていた。天井の照明は明るく、深夜を感じさせない。

ロビーには自販機もいくつか並んでいた。

僕がトイレから出てくると、一人の女性が小さなソファに腰掛けていた。

この時間にウロついているのはあのパーティーの参加者だろうか。僕が盗み見る視線に気づいたのか、彼女は不意に顔を上げた。

「あつ」

「アキコ」

以前コンタクトを探していた韓国人だった。

彼女はソファから立ち上がると

「ドウシマシタ？」

「いや、あたし、今日パーティーで」

僕は、彼女の片言の日本語が苦手だった。

「ワタシモデスヨ。ズットイマシタ。イマ、スコシヤスミマシタ」

彼女は、懐かしい友人にでも会ったように、次々に言葉を発したが、半分は聞き取れなかった。

僕は作り笑顔で適当に相槌を打った。

「モドリマスカ？」

「う、うん……」

僕はヨンジェと一緒に部屋へ戻った。

「ヨンジェは、日本にいて寂しくないの？」

僕は廊下を歩きながら、小さな声で訊いてみた。

「アキコ、サビシイデスカ？」

「いや、あんたが……ううん、いいや。何でもない」

「ナンデモ？」

彼女はそう言って、ただ笑っていた。

僕もつられて笑った。

第17話

「遅かったじゃない……って、その人だれ？」

ヨンジェと一緒に戻った僕に、恵美子が言った。

「あら、確か、留学生の娘よね」

エナが僕という彼女を不思議そうに見つめた。

「ハイ、ワタシ、ユン・ヨンジェです。コンバンハ」

彼女はそう言って、会釈をした。

ヨンジェは、洋介やエナが通う大学の留学生らしい。

「でも何で、亜希子と一緒に？」

恵美子は再び訊いた。

「ワタシ、アキコ、トモダチデス」

……えっ、友達なの？ 僕はそう心で呟いた。

僕が駅での事を説明すると、皆は納得した笑みを浮かべた。

「ヨンジェ」

奥の部屋から誰かが呼んでいた。

「ソレジャ、ワタシキマス。マタネ、アキコ」

彼女は、そう言って皆にも手を振ると、その場から立ち去った。

さすがにこれだけ人数がいると、仲のいいグループが自然に分かれて固まっているようだ。

奥の部屋に行ったヨンジェは皆に溶け込んで、何となく人気者だった。

「しかしあんたも、けっこう人がいいんだね」

恵美子が僕を肘で突いて言った。

「なんで？」

「外で落したコンタクトなんて、普通捜さないでしょ」

「彼女に圧倒されてさ」

「それを見つける所もすごいよな」

洋介がそう言って笑った。

エナも恵美子も「言えてるう」と言つて、笑つた。
僕は、大勢で話してこんなに楽しい気持ちになるのは、初めてだ
と思つた。

「あら、エミちゃん来てたの？ 声かけてよお」

振り返ると、そこに立っているのは棒切れのように細い身体をし
た生き物だつた。

ツンツンとヤマアラシのような茶色い髪と細く描かれた眉毛。彫
が深い顔は少し日本人離れしているが、ヒゲの剃り跡といい、声と
いい、どう考えてもそれは男だ。

タイトなブラックジーンズに襟の大きな赤いシャツを着ている。
何だか、漫画のキャラクターみたいだ。

「あれえ、何処にいたの、あたしぐるつと回つたんだよ」

「いま、お手洗いに行つてたのよ。何だか便秘ぎみでさ」

「もう、てっちゃんてば」

恵美子はそう言つて大きく笑うと、彼の腕をバシバシと叩いた。

「少し見ないうちに、また胸が大きくなつたんじゃないの？ 少し
分けてよ」

「好きなだけあげるよ」

恵美子は自分の胸を彼に差し出すような仕草をして笑つた。

「あら、あんたたち、相変わらず何時も一緒なのね」

てっちゃんと呼ばれた男は、洋介とエナを代わる代わる見て言つ
た。

「たまたまでしょ」

エナが即効で返す。

「ま、いいけどさ」

と言いながら、今度は僕に視線を止めた。

「あら、お初の娘？」

彼は僕を上から下までマジマジと見つめた。

大きく襟の開いた首にぶら下げた金色のネックレスが、間接照明に反射してキラリと光った。

グラスを持つ手の小指が立っている……

「彼女、バイトの友達の亜希子」

恵美子が紹介してくれたので、僕は軽く頭を下げた。

「ショートカットがとても素敵ね」

そう言っただけ微笑むと、てっちゃんと呼ばれていた不思議な男は、その場からいなくなつて、離れた場所で再び誰かと楽しそうに話していた。

僕は、彼のヒョロリとした後姿をしばらく見ていた。

「あいつ、ゲイバーでバイトしてるんだ」

洋介が僕に言った。

「げいばあ？」

「ちよつと変わってるけど、イイ奴だよ」

洋介は優しい笑みを浮かべて、そう言った。

パーティーはまだ続いていたが、朝の3時ごろになると洋介が車で僕と恵美子を送ってくれた。

帰り際、僕を見つけたヨンジェは駆け寄ってきて、再び握手をした。

白みかけた朝まだ来の空が何だかとても清々しく感じて、僕は家に着くまで窓の外ばかりを眺めていた。

第18話

僕は何故かあの洋介という人の事が気になっていた。

おそらく年上のせいなのか、彼は僕を女として見ていないような気がした。

それとも、もう少し大人になれば、同じ世代同士でも男女の分け隔てなく友達が出来るものなのだろうか。

洋介に毒づいていたエナは、元カノだそうだ。何だか腐れ縁が続いているのだと、恵美子が話してくれた。

僕は、あのパーティーに顔を出した事で、一気に世界が広がったような気がしていた。

しかし、世界が広がると言う事は、それだけ悲しみに対する間口も広がると言う事を、この時僕は考えもしなかった。

3日後、洋介が入院した事をエナが教えてくれた。

僕は考えた挙句、翌日病院へ行く事にした。

途中、駅前の花屋でリンドウとトルコキキョウの小さな鉢植えを買った。

花を買うどころか、花屋に入ったのも初めてだった。

「あれ？ 予想外のお客が来たな」

病室に入った僕を見て、洋介は笑ってそう言ったが、何だか妙にやつれたその笑顔は弱々しく見えた。

僕は出来るだけ明るい笑顔を返して、鉢植えを窓際に置いた。

ガーベラとヒメひまわりのブーケが置いてあった。きつとエナが持ってきたのだろう。

僕は小さな丸椅子に腰掛けて

「外はまだまだ暑いね」などと、ありきたりな言葉を言ってみたりした。

「この前水分取りすぎてさ」

「水分？」

僕は、何だか分けが判らなかった。

「俺、腎不全なんだ」

「腎不全？」

「腎臓が殆ど機能してないのさ」

「それだと、どうなるの？」

「身体の中の老廃物が体内に蓄積するんだ」

彼は、僕の不安な顔を見ると、小さく笑って

「だから、人工透析をして、血液の中にたまった老廃物や水分を取り除くんだ」

「人工透析……」

何処かで聞いた事はある。

「でも、それにも限度があるからな。この前パーティーの時に水分取り過ぎたんだ。俺なりにセーブはしていたんだけどな」

「水分取りすぎると駄目なの？」

「腎臓が機能しないと、血液中に水分がどんどん溜まるんだ。普通は腎臓が血中の老廃物と一緒に余計な水分を尿に変えるのさ」

「そうなんだ……」

「賢い臓器とは、よく名づけたもんだよな」

洋介は天井を見上げるようにして笑った。

「俺が一日に飲める水分は250CCだけなんだよ」

「い、一日250CC？」

「それ以上取ると、こういう目に遭う」

洋介はそう言って、力なく笑って見せた。

「一気に体内の水分を抜き取ったから、今は身体がだるくてね」

食事制限に水分制限。そんな制限を受ける人を間近で見たのは初

めてだった。

どんなに喉が渴いても、彼は一日250CCの水分を越えてはならないのだ。

僕はどんな顔をして、彼を見つめていたのだろう……

自分でもそんな事に気を配る余裕が無かったのかもしれない。

病院の敷地の木々からやたらと鳴り響くセミの声が、今更ながら僕の耳に届いてきた。

「大丈夫だよ。そんな顔するなよ」

洋介は僕の顔を見つめながら、命いっぱい強がった笑いを浮かべた。

「なんだ、俺に惚れたのか？」

「ば、バカな事……」

「ハハッ、冗談だよ」

彼は、わざと声を出して笑うと、誰かが見舞いに持ってきたらしい袋入りのクッキーを僕に手渡して

「でもお前、ちよつと変わってるよな」

「な……何処が？」

「なかなかカワイイし、恵美子にだって負けてないけど、いや素材はそれ以上かも。でも、あいつはバリバリ女って感じなのに、亜希子は何だか少年って感じた」

そう言われて僕は、何だか思わず赤面した。

洋介は僕の複雑な表情を見て直ぐに

「いや、ごめん。一応ほめ言葉なんだけど」

僕は彼の言葉にただ笑って、貰ったクッキーを齧った。

「あれ？ 亜希子は左利き？」

「えっ？」

僕はいきなりの彼の指摘に驚いた。

「う、うん。箸とかは矯正されたけど、元々は左。何で判ったの？」

「ほら、クツキーの袋を切るのに、右手で支えて左で切ったからさ」
「へえ、そんなんで判っちゃうんだ」

僕は素直に驚いて見せた。そんな細かい事、自分でも意識した事が無い。

しかし、意識しない事にだからこそ、利き腕の癖が出ると言う事なのか。

「俺さあ、中学まで神戸にいたんだ」

彼は頭の後ろに両手を組んで話し始めた。

「そんな時、タカシっていうマブダチがいてさ」

「マブダチ？」

「そう。小学校からずっと、何時も一緒に、何をするのもね。でも、中三の春に、神奈川に引越す事になって。俺、ギリギリまでタカシに言えなくてさ。」

先生がクラスみんなに報告した時、タカシも初めてその事知って……

アイツ、めちゃくちゃ怒ってたなあ」

洋介は天井を見上げながら、その先に見える何かを見つめているようだった。

「そのタカシに似てるな」

「はあ？」

「亜希子の目さ」

「目が？」

「そう言えば、アイツも左利きだったつけ。関係あんのかな」

洋介はそんな事を呟くように言いながら、一人で笑った。

僕はどう応えていいのか判らなくて、つられるように笑って見せた。

第19話

「あら、ガールフレンドが来てたんだ」

病室の入り口を見ると、エナが立っていた。

ここは4人部屋なので、部屋にドアなどはない。

エナは僕に小さく手を振って

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

パーティーの夜見た時と違って、何だか爽やかに見えたのは、化粧が薄いせいだろうか。

それともパンツルックのせいだろうか。

「なんだか、今日はモテモテだな」

洋介は相変わらず力なく笑って見せた。

「あつ、じゃあ、そろそろあたし行きます」

「あら、遠慮いらないのよ」

「そうだよ」

「でも、バイトあるから」

バイトにはまだ時間があったが、とりあえずそれを口実にした。

「そうか。じゃあ、暇だったら何時でも遊びに来いよ」

彼はそう言って、小さく左手を上げた。

「そうそう、洋介は寂しがりやだからさ」

エナが笑って付け加えるように言った。

僕は二人に手を振りながら病室を出た。

外へ出ると、セミの鳴き声はいっそう大きく感じた。

空を仰ぐと暑い陽差が並木の間から僕を照りつけて、木立の暗闇から聞こえる喧騒に吸い込まれそうになった。

彼は、洋介はどうして僕が、昔の親友に似ていると思ったのだろう。

僕は、ふと彼の言葉を思い出した。

それでも、洋介が僕にとって話し易い人間だと言う事は確かだ。
年上という事を考慮しても、何だか落ち着く。

昔の友達の事なんかを話してくれる僕は、彼にとって話し易い相手なのだろうか。

僕は、病院の建物を見上げながら、通りへ出た。
青い空が、締め切った窓全てに映り込んでいた。

僕は、それから午前中に度々洋介の病室を訪ねた。

彼の気さくな雰囲気がとても心地よかった。

ただ、食事や水分制限している洋介には、何を見舞いに持っていたらいいのか判らなかった。

洋介は4人部屋の窓際のベッドにいる。

隣は空きになっていて、向かい側にはオバサン。その隣にはおじいさんがいるようだ、二人共殆どカーテンを閉めている為、よく顔を見たことはない。

「あら、いらつしゃい」

その日、僕が病室へ入っていくと、この前のパーティーで見た男がいた。

てっちゃんと呼ばれていた男だ。

ハードロックカフェのちびTシャツの首には、やっぱり金色のネックレスが輝いている。

「洋介、結構口リ趣味だったの？」

「ちげえよ」

てっちゃんは僕に向かって微笑むと

「亜希子だっけ。ほら、あんたも座りなさい」

そう言つて差し出した丸椅子を、ポンポンと叩いた。

僕は、あまり見てはいけないと思いながらも、彫の深い不思議な彼の顔を盗み見た。

「珍しい？」

彼はそう言つて、僕に笑いかけた。

「えっ、いや、えっと……」

「哲夫は、一応女だと思つてやつてくれよ」

洋介が、笑つて僕に言つた。

「て、哲夫？」

「あたし、市原哲夫。だからみんなてっちゃんて呼ぶのよ」

「はあ……」

呼ぶのよつて……僕は、再びヒゲの剃り跡が見える、てっちゃん顔を見つめた。

「亜希子つて、なんだか少年みたいな娘ね」

……また言われた。

彼も、僕に何かを感じるのだろうか。

「そ、そう？」

「なあんか、可愛いわ。連れて帰りたい」

「おいおい、未成年だぜ」

洋介が哲夫の腕をポンと叩いた。

「じゃあ、あたしは邪魔しちゃうから、そろそろ帰ろつかないてっちゃんはその言つて立ち上がった。

「サンキュウな」

洋介が笑顔で言つと、てっちゃんは少しテレ笑いを浮かべて

「なあに、水くさい」

そう言つて、彼の手を少しだけ撫でて、僕に手を振りながら病室を出て行つた。

僕の横をすり抜けた時、ポンと香水の匂いがした。

「あの人、ゲイなの？」

僕は、そつと洋介に尋ねた。

「まあ、見た通りつてところだろう」

「ふうん」

彼の言葉に、僕はただ頷いた。

哲夫も洋介と同じ大学らしい。

彼は、男の身体に女性の心…… M t F - G I D なのだろうか。

それとも、ただのオカマ？ オカマって、なんだ？

僕は、自分以上に不可解な存在を見て不思議な気持ちになったが、確かにてっちゃんは、何だか気さくで善人っぽい感じの漂う人だった。

第20話

「ちょっと、コーヒー買ってきてくれよ」

ある日、洋介病室で彼が言った。

「えっ、駄目でしょ」

「少しなら大丈夫だよ」

「ほんとうに？」

僕は疑わしい目で彼を見つめた。

「全部は飲まないよ。少しだけ、な」

僕は仕方なく休憩ロビーに在る自販機に向かった。

彼は、手渡した冷たい缶コーヒーを少しずつ、とても美味しそうに飲んだ。

本当は、もつと一気に飲みたい気分には違いない。

「美味しい？」

僕はその至福の横顔に、思わず言った。

その時看護師が病室に入ってきた。

「ヤバ」

洋介は慌てて缶コーヒーを僕の手を持たせた。

向かいのベッドに用事だった看護師は、一応こちらにも視線を送ると

「坂町さんは、人気があるのね」

そう言つて微笑みながら出て行った。

「あぶねえ。また叱られる所だったよ」

「また？」

僕はそう言つて息をつくと、肩をすくめた。

「こんなにしょっちゅう来て、亜希子もよっぽど暇なんだな」
「バイト以外はね、マジ暇」

「彼氏とかいないのか？」

「彼氏ねえ」

僕はチョトだけ窓の外に視線を移して「必要ないなあ」

「何だよ、男嫌いか」

「そう言うわけじゃないけど」

僕は、そう言った後、少しだけ間を空けて

「ねえ、ずっと友達でいられる？」

「はあ？」

彼は僕の顔を見つめた。

「何だよ、お前友達いないのか？」

「いない事はないけど、男の友達はいない」

「なに、彼氏より男の友達が欲しいってか？」

「まあね」

僕は、彼が手渡してそのままの缶コーヒーを飲み干した。

「言っとくけど、セフレは無理だぜ」

「バカ言わないでよ。キモイ」

洋介の冗談に付き合って一緒に笑った。

彼は笑った顔を一瞬真顔に戻すと

「お前、もしかして……」

彼は僕の瞳の中を覗き込むようにして言った。

僕は、心のずっと奥を覗かれているようで、何だか気恥ずかしかった。

「な、なに？」

「いや、何でもない」

彼は、そう言って笑いながら

「ほんと、亜希子って変わってるよな」

ここでは時が穏やかに流れて、僕は洋介の笑顔を見ながら些細な友情を勝手に感じたりする。

彼の僕に注がれる笑みが、どういう意味を持っているかなんてい

ちいち考えはしないけど、男でも女でもなく、僕といういち個人に送られている事は確かなのだ。

「あの看護婦さんきれいだね」

「そうかあ？」

「なあんだ、洋介のタイプじゃないんだ」

「けっこう性格キツイぜ」

「それは、あんたがいけない事するからでしょ」

思わず二人で笑った。

彼の病室の窓から差し込む残暑の陽差は、僕にとって心地よいものだった。

僕は洋介と話しているのが楽しかった。

バイトでは、恵美子や末穂と女としての会話を交わして、病院へ来れば洋介と男同士とまでは行かないが、それに近い気持ちで会話を楽しめる。

もちろん、洋介の前でも自分を僕とは言わないが。

昌美とオサムをいっぺんに失ったような気持ちでいた僕は、再び心のバランスを取り戻していた。

「ねえ、何時退院できるの？」

「もうしばらくかな」

「そう」

もう直ぐ学校が始まる。夏休みが終わるのだ。

「退院したら、メールちょうだいよ」

「ああ、もう直ぐ学校だもんな」

「学校始まったら、放課後来るよ」

「まあ、俺は何時でも暇だから」

洋介はそう言って笑った。

* * *

「あああ、もう夏休みも終わりかあ」

見切りの弁当を整理しながら美恵子が言った。

今日は夏風邪で、未穂が休みだった。

「ねえ亜希子、洋介のお見舞い行ってるんだって」

「えっ、う、うん」

「なに、タイプなの？」

「別に。一緒にいて面白いし、バイト以外は暇だからね」

「ふううん」

恵美子は少しイヤラシイ目で笑った。

第21話

9月に入り、学校が始まった。

サクラを廊下で見かけたが、もちろん知らん顔で通り過ぎる。

一瞬こちらを見た彼女の視線は、僕を蔑むものだった。

昌美とも久しぶりに顔を会わせた。

メールはたまにやり取りするが、あの晩彼女のキスをする様子を見てから、僕は彼女を避けていた。

彼女は汚されてしまった……少し大げさだけど、僕の気持ちはそんな感じなのだ。

学校はなんだかいつそうつまらないものに思えて、早く帰りたい。そんな事を考えるようになった。

始業式が終わって放課後、僕の携帯にメールが入った。

洋介からだった。

今日退院すると言っていたから、きっとその事だろう。

『退院したよ』

あまりにもシンプルすぎる内容だった。

しばらくは大学を休んで自宅療養だと、昨日会った時に言っていた。

洋介は家族と一緒にの自宅だから、これではらくは会えそうも無い。

さすがに自宅には行きにくいし、自宅療養の彼を外へ呼び出すわけにもいかないだろう。

「アッコ」

昇降口で昌美が声をかけてきた。

僕はなんとなく一人でここまで来ていたのだ。

「久しぶりに一緒に帰ろうよ」

「オサムは？」

「今日も部活だつてさ」

彼女は口を尖らせてそう言った。

「なあんか、まだまだ暑いよね」

昌美はいろいろ喋っていたが、僕は適当に相槌をとりながら彼女の唇を見つめていた。

零れる白い歯が、とてもきれいだった。

「どうかしたの？」

「えっ？」

「なあんか、へんだよアツコ」

「そう？」

「今日もバイト？」

「うん。4時半からね」

「あたしは5時から」

昌美は白い歯を見せて笑うと

「どっか寄つてく？」

少しの時間だったが、久しぶりに昌美と街をブラブラした。

並木通りでは、まだしきりに鳴くセミの声が聞こえた。

学校が始まって1週間が過ぎた。

洋介とは、退院してから一度も会っていない。

バイト先で恵美子や未穂と会えば気晴らしにもなるが、やっぱり洋介と話がしたい。

電話をすればいい事なのに、相手の都合とかを勝手に考えて、何となく控えてしまう。

そんなある土曜日の朝、洋介から電話があった。

「元気？」

「それは、こっちのセリフ」

「そうだな」

電話の向こうから聞こえる彼の笑い声は、軽快だった。その声が、とても懐かしく感じた。

「ドライブでもどう？」

「えっ？」

「鎌倉にでもさ。あんまり遠乗りはまだ疲れるから」

洋介はそう言って再び笑った。

「大丈夫なの？ 療養中なんじゃ」

「少しは気分転換しないとさ。気軽に誘えそうなのは亜希子だけだし」

僕は、少しだけ考えたが、結局OKした。

気軽に誘えるという言葉が嬉しかった。

「実はさ、今鶴見の駅前なんだ」

彼は、すぐ迎えに行くからと言って電話を切った。

僕は慌ててパジャマを脱ぎ捨て、何を着ていくか迷いながらクローゼットを開けた。

そして、ふと考えた。

何だ、何舞い上がってるんだ。別にデートでもあるまいし、着る服に迷う必要なんか無いじゃん……

僕はハードウオッシュのジーンズにTシャツを着てツイルのパーカーを羽織った。

外に車の音が聞こえたので、窓から通りを覗くと洋介の車だった。いそいで階段を駆け下りて、玄関でレッドウイグの靴ヒモを結ぶ。

「亜希子、何処に行くの？」

母の声が背中から聞こえたので

「ちよつと出かけてくるから」

僕はそれだけ言って外へ出た。

他にも何か言っていたようだが、何時もの事だ。聞く必要はないだろう。

玄関を出て直ぐ、通りに停めた車から降りてきた洋介が見えた。
僕は逸る気持ちが表に出ないように、洋介にそれを悟られないように、さりげなく歩いて、軽く左手を上げて見せた。

第22話

海はまだ夏の陽差を残していた。

家族連れやカップルが砂浜のここそこで日向ぼっこをしている。

湘南海岸沿いの道路を走ると、窓から入る海風とその香りが心地よかった。

こうして見ると、湘南もそんなに汚い感じはしない。

駐車場にはサーフボードを積んだ車の姿もあった。

交差点を曲がって江ノ電の踏切を渡り、道なりに進むと右手に大仏が見える。

土曜日だからなのか、敷地内の専用駐車場は混雑していた。

「駐車場、混んでるね」

僕の言葉に洋介は鼻をならして笑うと

「全然平気だよ」

そう言って、障害者用スペースに車を滑り込ませた。

僕は一瞬驚いたが、そう言えば洋介は人工透析をしている。れっきとした障害者なのだ。

よく見たら、車のリアガラスに小さな障害者シールが貼ってあった。

料金所で駐車チケットを貰う際に、彼が提示した障害者カードには、「第1級身体障害者」と書いてあったのがチラリと見えた。

第1級……僕は、彼の病気の重さを再確認した気がした。

そんな彼が、車を普通に運転して、僕の横で笑ってソフトクリームなんかを食べている姿は、何だか不思議に思えた。

「うまいだろ、ここのソフト」

「うん。美味しい」

僕がバナナを頼むと、洋介は

「お子様だなあ」と言った。

「大人はゴマだよ」

「ゴマ？」

そう言って、ゴマソフトを手にニンマリと笑った。

「ゴマなんて邪道だね」

別に普通のソフトクリームだったけど、何だか美味しく感じた。鎌倉は中学の遠足で一度来たことがあるが、大仏の中に入れることは知らなかった。

内側の壁面の継ぎ目部分には、たくさんの小銭が挟んであった。

「これって、願掛け？」

「そうだろう。みんな、信心深いんだよ」

僕の質問に、洋介はそう言って笑った。

鎌倉のお寺は大きかった。

ここも中学の遠足で来たはずなのに、あまり記憶がない。

玉砂利の境内を歩いて階段を上る。

そこらじゅうに小さな祠があって、何かを奉つてある。

「せっかくだから」そう言って、洋介に促されるまま参拝もした。

僕は小銭を投げ入れる時、何を願おうか考えた。

どうせなら、この身体を男にするか、心を女にして欲しい。どっ

ちでもいいから統一して欲しい。

でも、そんな事願ってもどうしようもない事は判っている。

（洋介の病気が良くなりますように……）

他にはそれしか思い浮かばない。

僕は静かに手を合わせた。

しかし、後で知ったが、腎不全は自力回復はないのだそうだ。一度機能を失った腎臓は元には戻らない。

腎臓移植しか透析を逃れる方法はないのだが、移植手術を待つ患者は多く、臓器は極端に不足している。

それでも、運よく移植がうまくいったとしても、拒絶反応を防ぐために一生クスリを飲み続けることになる。

彼はどんな願い事をしたのだろうか。
ちよつとだけ気になったけど、結局訊かなかった。

僕はバイトを急遽休んだお詫びに、お店にハトサブレのお土産を買った。

「俺が誘ったから」そう言っ、代金は洋介が出してくれた。
帰りの湘南海岸は、来るときとは違ってひっそりとしていた。
家族連れの姿は無く、ポツリポツリとカップルとサーファーの長い影が揺らめいていた。

長閑に犬の散歩をしているのは、地元の人だろうか。
太陽は海岸線に大きく傾いて、砂浜は淡い黄褐色に染まりつつあった。

車を停めて僕たちは砂浜に下りてみた。

少し乾いた風が緩やかに吹いて、僕たちの髪を揺らした。
湘南の砂浜は初めてだ。何だか妙に黒々としているのは夕方のせいだろうか。

よく見ると、けっこうゴミが落ちているけど、オレンジ色の雲がきれいで、僕は空ばかり見ていた。

洋介がポケットから取り出したデジカメを僕に向けてシャッターを押した。

「なんだよ。カップルみたいじゃんか」

「そんな事ないだろ。友達同士だって写真は撮るぜ」

「いいよ、別に撮らなくて」

僕は写真が好きではない。

この姿を写真で見ても、自分だという実感がわからないのだ。
それでも、洋介は数枚シャッターを切った。

黒々とした砂浜を良く見ると、あちこちに貝殻が落ちている。

僕は、サクラ貝の淡いピンク色の貝殻が目について、思わず拾い上げた。

「そうやってると、やっぱり女の子だな」

その姿を見ていた洋介がそう言って笑ったので、僕は手にした貝殻を慌てて棄てた。

夕日があつという間に海岸線に消えようとしていた。

空も雲も、そして砂浜も茜色に染まって、僕たちを包み込んでいた。

その時見た夕日は、まるで写真のように僕の瞳に焼き付いて、ずっと忘れられない一枚となった。

翌日バイトへ行くと、恵美子がしつこく休んだ理由を聞いてくる。

「なになに、男でしょ」

「そんなんじゃないよ。友達と出かけたんだよ」

「ふうん」

彼女は納得行かない顔で笑いながら、少しイヤシイ目で僕を眺めた。

僕は他の連中に気づかれないように、レジの横に置いてある黄色い臓器提供カードを一枚手に取って、腎臓に丸を着けて財布にしまい込んだ。

洋介とは血液型が違うから、万に一つもクロスマッチする可能性は無いけれど、それでも何だか持っておきたい気持ちになったのだ。ささやかな友情のしるしに……

第23話

洋介とドライブに行ってから、彼とは会っていない。

ただの友達でもこんなに会いたくなるものなのだろうか。

しかし、療養中の彼に、こちらから外へ出て来いと言い難いし、やっぱり電話すのも何だか気が引けた。

僕は再びストレスが募って、恵美子や未穂に対して、妙な欲望が沸き起こりつつあった。

どうして心のバランスをうまく保てないのдар。

「ねえ、なんか食べて帰らない？」

そんな時、未穂が珍しく、バイトの帰りに誘ってきた。

「いいけど、珍しいね」

「両親が1泊で旅行ったんだ」

なるほど、そう言うわけか。

たまに両親がいない時ぐらい未穂も開放されたいのだろう。

彼女の普段の門限は夜の八時だそうで、バイトの時だけ特別に遅い時間が許されている。

だから、彼女は何時もバイトが終わると必ず家に電話を入れるのだ。もちろん、寄り道は許されない。

「恵美子は？」

「彼氏と約束あるって」

駅の近くにある和食のレストランで食事をして、ゲーセンでプリクラを撮った。

プリクラなんて本当は嫌だけど、僕にしてみればこれも社交手段の一つだ。

僕もそうだけど、夜のゲーセンなんて全く入らない未穂は、何だ

か楽しそうだった。

二人でクレーンゲームをやったが、欲しいものは一向に取れず、とりあえず狙ったわけの判らないキャラモノのぬいぐるみが二人の手にあった。

二回ほどチャライ男にナンパされた。

「ねえ、ウチ寄っていかない？」

未穂は一人が寂しいのか、そう言っ僕を家に招いた。

彼女の家は大きくて、庭の片隅には小さな小便小僧のオブジェが置いてあった。

玄関を開けると、ほの暗い中を、毛むくじらの何かが走ってくるのが見えて、僕は思わず目を凝らした。

未穂が電気をつけると、それは黒いトイブードルだった。

彼女の帰りを待ちわびていたのか、やたらとシツポを振って彼女にまわり着いた。

何だか生き物というよりぬいぐるみみたいだ。

人懐っこい彼は、僕の膝の上にもしきりに乗っかってくる。

おやつを与えて、少し遊んでやると、自分のケージに入って行った。

「未穂は兄弟いないの？」

「うん。お姉ちゃんいるけど、今東京の大学に行ってる」

「そう」

テレビからは深夜のバラエティー番組が流れていた。

「ねえ、未穂ってもう経験済み？」

「な、何よいきなり」

「どうなのかなあって思ってたさ」

「ウチ、カトリックの高校行かされるくらいだよ。そんなのまだまだだよ」

「ふうん。そっかあ」

目の前のウーロン茶を飲んで、僕は軽く息をついた。

一瞬の沈黙が妙に長く感じて、部屋の向こうのケージで犬がくしやみをするのが聞こえた。

「ねえ、あたしもまだだから、一緒に練習しない？」

男とした事が無いのは本当の事だ。

「はあ？ 何言ってるの？」

「だって、全然ってのも寂しいでしょ？」

「そ、そんな事言ってたって……」

未穂は困惑した笑みを浮かべた。

僕は未穂に身体を寄せて、そつと胸を触った。

彼女は小さく身を引いたが、その瞬間頬は紅潮して、僕の手を軽く掴んだだけだった。

「未穂、女子高でしょ」

彼女は目を閉じて無言で頷いた。

「こういう事してる娘、クラスにもいるんじゃないの？」

未穂は黒髪を振り乱すようにして大きく首を横に振りながら

「そんなの、わかんないよ」

殆ど無抵抗の未穂を、僕はゆっくりとソファに押し倒した。

テレビの音に混ざって、二人の小さな吐息が零れるようにリビングを埋め尽くした。

次の日未穂はバイトを休んだ。

具合が悪いとの事だが、昨夜の事がショックだったのかもしれない。

未穂は嫌々ながら、最後まで僕のされるがままだった。

そして、欲情に流されたのか、彼女自身も僕の身体を僅かに愛撫した。

彼女は再び僕に会っただろうか。

僕は、少しだけ昨晚の事を後悔していた。

恵美子も一緒にいたなら、あんな事は無かつただろう。
もしかしたら、未穂も僕の前から消えるかもしれない。
何時もと変わらない恵美子の明るい話し声の横で、僕は再び訪れ
る孤独を恐れていた。

第24話

その日バイトが終わってから携帯に留守電とメールが入っていた。洋介が再び入院したらしい。

「どうしたの？」

メールを見て硬直する僕に、恵美子が声をかけた。

「洋介、再入院だって」

「うそ。退院したばかりじゃん」

「酷いのかな？」

「どうだろう。メールは誰から？」

「エナから」

「じゃあ、電話してみようよ」

僕は恵美子に促されて、エナに電話を入れた。しかし彼女の携帯は繋がらなかった。

洋介からあれ以来連絡がないのは、体調が思わしく無かったからなのかもしれない。

翌朝、エナから電話が来た。

電話が繋がらなかったのも、とりあえずメールを送っておいたのだ。

「亜希子？　今から学校だよね」

彼女はやけに遠慮がちな口調だった。

「う、うん……なんで？」

「病院来れないかな？」

「病院？　洋介どうなの？」

「とりあえず、来れたら来て」

エナはそれしか言わなかった。

僕は例えようの無い不安に襲われて、家を出ると学校とは反対行

きの電車に乗った。

駅から病院まではそう遠くはない。

僕は何かに追い立てられるように、とにかく走った。

ついこの間まで、ちょっぴり楽しい気分で歩いた道のりが、やたらと重い空気に包まれて、何だか身体まで重く感じた。

途中で自転車に乗ったヤバイ筋の人とぶつかりそうになって怒鳴られた。

何で自転車なんだよ。ベンツでも転がしてろ……

僕は肩で息をしながら病院の玄関を抜けてエレベーターに乗った。通路を小走りに歩いていると、休憩ロビーの椅子にエナの姿が見えた。

「エナ」

「ああ、来たのね」

「うん。洋介は？ 酷いの？」

「今は安定してる。一応は……今、お母さんが来てるの」

「そう」

僕はエナの前の席に腰掛けた。

「ごめんね。学校サボらせちゃったね」

僕は大きく首を横に振って

「いいよ、学校なんて」

「なんか飲む？ 何か汗だくだよ。走って来た？」

エナはそう言いながら、自販機の所へ行つて、アクエリアスを買ってきてくれた。

僕がアクエリアスのアルミボトルに口を着けた時、彼女は

「洋介の事、好き？」

遠慮がちに小さな声でそう言った。

僕は、アクエリアスを喉に流し込んでから、一息ついて

「はあ？」

「何だか、洋介も亜希子の事すごく気に入ってるみたい。4つ違いなんて、どうって事ないもんね」

薄々は気づいていたが、やっぱりそうだ。エナはまだ洋介を好きなんだ。これだけ病院へ来るのだから当たり前か……

「洋介とは何で別れたの？」

「えっ？」

彼女は反対に僕に問われて少し驚いていたが、気を取り直すように「ううん。何でかな。好き過ぎて、相手を束縛するのが嫌だったから……」

彼女はそう言って、小さく笑うと

「なあんで、言い訳だよな」

「あたしと洋介は、タダの友達だよ。マブダチ」

僕は笑顔でそう言った。

「マブ…ダチ？」

「まだ浅いけど、マブダチ」

エナはクスクスと笑って

「亜希子って、やっぱり変わってるね」

「そうかなあ」

僕はそう言って、再びアクエリアスを口に入れた。

「マブダチに会ってきたら？」

「でも、お母さん来てるんでしょ」

「大丈夫よ」

僕が少し俯くと、エナは

「じゃあ、一緒に行く？」

そう言って、立ち上がった。

その時、通路の奥が何やら急に騒がしくなるのが見えた。

ナースステーションから看護師や医師が部屋に駆け込んでいる。

誰かが締め出されるように廊下に出てきた。

エナはそれを見て

「洋介だ」

そして、駆け出した。

僕はエナの後を追った。

こんな勢いで院内の廊下を走っていいのか……それほど全力だった。

廊下に閉め出されたのは洋介の母親だった。

エナの姿に気づくと、すがりつく様に

「洋介が……」

再び容態が急変したらしく、看護師が慌しく部屋に出入りしている。

医師が、医療用語を叫んでいるのが聞こえてきたが、何の事かさっぱり判らない。

ドアの隙間から少しだけ見えた洋介は、周囲の慌しさとは無関係にただベッドに横たわっているだけだった。

それはまるで、医療講習用の人形のようなだった。

第25話

この場にはそぐわないほどの優しい木漏れ日が、窓から降り注いでいた。

僕の耳には、ピーという心音計の最後の音が何時までも鳴り響いて、何度頭を振ってみても、それは止む事はなかった。

これは罰なのか……無理やり未穂を抱いてしまった僕への罰なのだろうか。

女性の身体で女性に欲情する僕への戒めなのだろうか。

それとも僕には、心の同性を対象とした友達を作る事が、許されないのだろうか。

僕の前から消えたのは、未穂ではなく、洋介だった。

僕とエナは並んで椅子に腰掛けたまま、会話は無かった。

時折通り過ぎる誰かの足音が、僕たちを包み込む沈黙の闇を掻き分けて、やたらと大きく聞こえた。

休憩ロビーの違うテーブルには、洋介の家族が集まっている。

弟と妹。二人共高校生のようだ。

だから洋介は、僕と接するのが上手だったのかもしれない。

友達と言うより、僕は妹みたいな存在だったのか。

父親はさつき、ようやく来たようだ。仕事を抜けるのに手間取ったのだろう。

母親に促されて、処置室へ洋介を見に行った彼は、抜け殻のように生気を失った表情を浮かべて戻ってきた。

僕は、見てはいけなそうに思いつつも、子供を亡くした父親がいたいどんな顔をするのか、ついつい盗み見てしまった。

そして今、涙はいつたん枯れたように、皆気丈に振舞いながら話

し合っている。

彼をどの業者に頼むか。

亡骸をどの葬儀会社に依頼するか、相談しているのだ。

「とりあえず、一端出ようか」

エナが、小さな声で言った。

鼻がまだ赤いままで、睫毛も濡れている。

僕は黙って頷くと、ゆっくりと立ち上がった。

僕たちがロビーを出ようとした時、洋介の母親が駆け寄ってきて深々と頭をさげて何度何度もお礼を言った。

僕はどうしていいのか判らずに、ただ立ち尽くしていた。

外の陽差は暑かった。その眩しさに思わず目を細めた。

今日という日が、何だか幻のような感じがして、現実感が無かった。

僕は本当に現実を生きているのだろうか。

そして、本当に洋介は死んでしまったのだろうか……

病院の建物を見上げると、やっぱり窓全体に大きく青空が映り込んでいた。

この建物は現実のモノなのか。

外があまりにも何時もと変わらない風景だから、今日この中で起きた事は余計に現実味が無かった。

不意に僕の携帯電話が鳴った。病院に入る際も、電源を切るのを忘れていたらしい。

電話は自宅からだった。

「ちよつと亜希子！ 今何処にいるの？ 学校から連絡があったわよ。あんた何してるの？」

凄い剣幕で母親の怒鳴る声が聞こえた。

「亜希子聞いているの？ あんたいつ……」

僕は無言で携帯の電源を切った。

「お母さん？」

エナにも、電話からの声が聞こえたのだろう。

「うん」

「ごめんね。学校サボっちゃって、叱られるね」

僕は大きく首を横に振ると

「ううん。呼んでくれてありがとう。お陰でさよなら言えた……」

「そうだね……さよなら言えたね」

エナは静かに呟くように言った。

正午を知らせるサイレンが、何処からか聞こえていた。

エナに聞いた話では、洋介は大学で心理学を専攻していたらしい。だから、僕の些細な動作を見て、左利きを当てたのだ。

そして僕は、彼が言った「お前、もしかして……」という言葉を思い出した。

彼はあの時何と言おうとしたんだろう。

僕の何に気づいたのだろう。

まさか、いや……それは無いだろう。

いくら彼でも、僕のF t M - G I Dに気づいたとは思えない。

でも僕は、心の何処かでは気づいて欲しいと、ずっと思っていたのかもしれない。

その日はバイトを休んだ。

家に帰ると母親にグダグダと小言を言われたが、何時も以上に僕の耳には入らなかった。

夜になってから、恵美子から電話があった。

電話の向こうでしゃくり上げる彼女の声で、僕は再び涙が止まらなくなった。

部屋の外に声が漏れないように、必死で押し殺した。

真っ黒なガラス窓に映る僕の姿は、ただの女の子だった。

僕の悲しみの理由は、他の誰のものとも違うのかもしれない。

でもそれは、誰にも判らないだろうし、僕自身誰かに説明する事は不可能だと思う。

第26話

残暑の続く空は蒼く果てしなく、そして大気が歪むほどに暑かった。

それを駆け抜けるように、彼は灰色の気体となって天に昇ってゆく。

何処までも高く伸び上がると、やがては霞んで空の蒼に溶け込んで見えなくなった。

僕は彼が消えてゆくその先の蒼を何時までも見上げていた。

そしてもう洋介という容をした彼には会えないのだと言うことを実感した。

通夜、告別式、そして火葬と僕は出席した。

通夜と告別式には友人達が溢れていた。

以前のパーティーで見かけた顔もずいぶんいる。

皆、まさか洋介がこんなに早く逝ってしまうとは思っていなかったから、頻繁に見舞いに行くような事はしなかったのだ。

口々に後悔の念を呟いていた。

洋介は心臓に水が溜まっていたそうだ。

前にちよつとだけ彼から聞いたことがある。血中に溜まった水分が心臓の中に少しずつ蓄積されると、やがて致命傷となるそうだ。

ヨンジェの姿を見つけた僕は、何故か自分から彼女に近づいた。

「ヨウスケ、トテモザンネン……」

彼女は俯いたままポロポロと涙を零した。

「洋介とも親しかったの？」

彼女は小さく首を横に振って

「アキコノトモダチ、ヨンジェノトモダチトオナジ」

そう言いながら、本気の涙をしきりにハンカチで拭っていた。

葬儀会場で僕を見つけたてっちゃんは、黙って僕を抱きしめてくれた。

僕は男の力で強く抱きしめられる苦しさを、今の悲しみとそっと置き換えて涙の雫を零した。

彼、いや彼女なのか……てっちゃんはオバサンの化粧品の香りでした。

エナと僕は、親族に混じってお骨を拾う事を許された。

母親以外で、彼の最後を看取ったのは僕たちだけだ。

もう何度も聞いた読経が、再び聞こえ出す。

目的によって違うのだろうが、どれも同じように聞こえる。

これで、死人は本当に成仏できるのだろうか。

火葬が終わるまでには小一時間かかると言われ、僕とエナは斎場の外へ出た。

大きな駐車場の隅に腰をおろして、二人でコーラを飲んだ。

ほとんど何も喋らなかった。

いや、本当は気を紛らわせる為にずっと喋っていたのかもしれない。

しかし、何を話したのかは全く記憶がない。それはきっと、エナも同じだと思う。

記憶にあるのは、雲ひとつ無いやたらと蒼い空。

そして、建物の陰に聳え立つ高い煙突の先から立ち登る灰色の煙

……

斎場は小高い丘の上に在って、周囲は木々に囲まれてひと気はない。

現実から離れたこの場所が、あまりにも非現実的で、僕はテレビの画面でも眺めるように空を見つめていた。

「あれ、洋介かな」

エナが不意に呟いた。

「どうだろう……釜が幾つも並んでたよね」

「そうだったね」

僕は彼女の寂しそうな横顔に向かって

「でも、そうかもね」

そう呟いた。

火葬後の御骨は生々しかった。

もっと粉々で灰が多いと思っていたのに、あからさまに人骨の名残を残していた。

しかし、どれがどの部分かはもう判らない。

これが本当に、僕と話、笑い、缶コーヒーを分けて飲みあつた彼の姿なのだろうか。

これが本当に、僕と一緒に湘南の砂浜を歩いた人の名残なのだろうか。

僕が拾ったのは、いったい彼のどの部分なのだろう……

突然眩暈と吐き気が襲ってきた僕は、斎場で倒れてしまい、気がつくとは休憩室の畳の上に寝かされていた。

目が覚めて起き上がると、傍には洋介の母親がいた。

「疲れたでしょう。ありがとうございます」

彼女は優しく微笑んで、僕に熱いお茶を入れてくれた。

何だか洋介の笑顔に似ていた。

緑茶の香ばしい香りが心に沁みて、少しだけ安らいだ。

第27話

次の日バイトに行くと、未穂に会った。

洋介の事で、未穂の事を考える余裕が無かった僕は、彼女の顔を見て、初めて二人で交わした禁断の行為を思い出した。

「大変だったね。大丈夫？」

気まずい空気を漂わせる僕に、彼女はそう声を掛けてくれた。

葬儀で会った恵美子は、そんな素振りは見せなかったが、今日もバイトを休んだ。

未穂は何時もと変わらない態度で接してくれるから、何時の間にか僕も普通に接する事が出来た。

そして帰りの更衣室で、彼女は小さな声で僕に言った。

「あのね……あたし、やっぱりああいう事はもう……」

「うん。ごめん」

「うん、大丈夫。でも、やっぱりあたし、男としたいから」

彼女は恥ずかしそうにそう言った。

僕は小さく微笑んで

「なあんだ、やっぱり未穂もエロいんだね」

「なっ……ふ、普通だよ」

彼女は頬を紅潮させて言った。

彼女はサクラのように、僕をヘンタイともオカシイとも言わなかった。

やはり学校には似た事をしている娘がいるのかもしれない。だから、サクラに比べて少しだけ免疫があるのかもしれない。

それとも、他人を理解しようとする彼女の優しさなのだろうか。でも、彼女も僕をただのレズっ気のある女だと思ったかもしれない。

今更、そんな事はどうでもいいけど。

僕は一見平凡な日常を取り戻していた。

僕が洋介の事でバタバタしているうちに、昌美はオサムと別れたらしい。

原因はよく判らないが、オサムがあまりにも部活に一生懸命な為、昌美の方が根を上げたみたいだ。

僕たちは再び放課後になると二人でブラブラしたりするが、今はお互いアルバイトをしているのでそうそう暇な時間もなかった。

まあ、日曜日の昼間には一緒に映画館などに行ったりするが。

バイト仲間の恵美子は洋介の事でずいぶん塞ぎこんでいたが、何とか元気を取り戻した。

彼女も、殆ど見舞いに行かなかった事を悔やんでいる様子だった。未穂とは何事も無かったかのように普通に仲良くしている。

彼女は恵美子にもずいぶん元気を分け与えようと気を使っていた。未穂は、精神的に僕たちよりも上なのかもしれない。

だから、あんな事をした僕を蔑むことなく普通に接してくれるのだ。

僕は再び行動を共にする昌美や、僕を軽べつ視しない未穂、そして同じ悲しみを共有する恵美子たちと触れ合う事で、傷つき崩れかけた心を元に戻せると思っていた。

元々真っ直ぐでもまっさらでもない僕の心なんて、直ぐに元に戻ると思っていた。

しかし、洋介を失ったショックはそれほど大きかったのか、僕の心の傾きはあらぬ方向へと捻じ曲がって修復は困難だった。

それに気がつく事さえ、僕自身まならなかったのだ。

バイトの帰り道、住宅街は閑散として人通りが無い。

街路灯は比較的多いが、大通りから入ると車通りもなくひっそりとしている。

僕は何時ものようにただ漠然と自転車のペダルを踏む。

前方にポツリと人影が見えた。

街灯に照らされた人影は、制服を着ていた。確か、この辺りを学区とする中学校の制服だ。

最近は中学生でもスカートが異常に短い。

てゆうか、どうしてこんな時間に中学生が制服なのだろう。もう10時をまわっている。

僕はそんな事を思いながら、彼女を追い越した。

携帯電話を開いてメールを打っているその娘は、僕より小さい背格好だった。

僕は、自分の身体が異常に疼くのを感じた。

横目で彼女を盗み見て、完全に追い越してしばらく行った角を、僕は曲がった。

その行動はまったく衝動的なものだった。

路地をぐるりと回って、再び元の場所へ戻った。

あの路地へ出た時、彼女の姿が無かったら諦めよう。いなくなっ
ていてくれ。

箆を外した欲望とは裏腹に、僕の中の僅かな善意が呟いた。

しかし、彼女はメールを打ち込むのに夢中なのか、足取りはかなり遅かった。

元の路地へ戻ると、前方にはさっきの中学生がまだいた。

僕は自転車を降りて彼女に近づいた。

直ぐ横は民家が途切れて、小さな公園が在った。その向かい側には夜は使わないコミュニティー会館。

僕は彼女を後ろから羽交い絞めにして、コミュニティー会館の敷地に引っ張り込んだ。

びっくりした彼女は、携帯電話を手から落していた。

「ちよつと、ナニ……」

右手で彼女の口を塞いで、左手で胸を触った。
かなり小さかった……ブラの感触ばかりがガサガサと手に伝わった。

女の子は恐怖で身体がすくんで、密着した僕の身体に、彼女の身体の震えが伝わってきた。

実際は、一人で痴漢に立ち向かえる勇敢な娘は少ないのだ。

僕はスカートの中に手を入れて、彼女の股間を触った。

しかし、本当はその感触を味わう余裕など無かった。

僕よりも小さな女の子とはいえ、僕の体格では彼女を押さえつけるのに全力を注がなければならない。

その時女の子の口元を押さえた僕の手に、温かい雫が触れた。
彼女の涙だった。

第28話

僕は暗がりで中学生の少女を襲った。

自分だって、高校入りたての少女の身体のくせに。

身体の疼きが堪えられなかった。

小さな後姿から露出した生脚が、僕の欲望を抑えていた鎖の鍵を壊してしまった。

口を塞がれた彼女は声を押し殺すように、嗚咽を堪えて身体を震わした。

流れ出る涙が僕の右手を濡らした。

僕は急激に気持ちいが冷めていくのを感じた。

我に帰って彼女から身を離すと、猛ダッシュで自転車に跨り、思い切りペダルを蹴飛ばした。

息が苦しかった。

心臓が張り裂けそうで、肺がはち切れそうだった。

何をしてるんだ……完全な犯罪だ。

方角も判らずにペダルを蹴り続けた。

暗がりの景色は、紙芝居の粗雑な風景のように僕の視界を通り過ぎて行った。

気がつくと、自分の家からはだいぶ離れた大通りに出ていた。

サイレンの音で、僕は一瞬身体を硬直させたが、1国を走る救急車の音だった。

ドップラー効果が目の前を通り過ぎてゆく。

僕は、息について自転車を降りると、歩道にペタリと腰をおろした。

鼓動はまだ僕の胸を内側から強く叩き続けていて、何度も深く息をついてみたがなかなか収まらなかった。

鞆からタバコを取り出して啜え、火をつけて空を仰いだ。
深い闇が何処までも広がって、僕が吐き出したタバコの煙は、悪魔の吐息のように水銀灯の僅かな光に照らされて漂いながら、暗黒へと溶けて消えた。

そんな僕の目の前で、車が急停車した。

ドカドカと空気を振るわせる音が、車内から溢れ出ていた。

「どうしたの？ 乗せてってあげようか？」

ナンパだった。

僕は歩道に腰掛けたまま、一瞬見た視線をそらして無言でタバコの煙を宙に吐いた。

「なんだよ、シカトかよ」

男が二人乗った騒がしい車はそんな言葉を吐き捨てると、エンジンを吹かしながら急発進して街道の闇に消えていった。

僕は街路灯が連なる喧騒と静寂の狭間で、膝を抱えてうずくまっていた。

何も考えられなかった。

ただ暗闇の片隅に、魂の欠片をひっそりと隠して、誰にも見られなくなかった。

* * *

その週の土曜日の夜、僕のバイトするコンビニに突然オサムが現れた。

「よう。頑張ってる？」

「うん、ぼちぼち。ここに来るの珍しいね」

僕のバイトするコンビニには、駅を降りてオサムの家とは逆方向に在るのだ。

「バイト終わったら、お茶でもしない？」

「ここナンパお断りなんですけど」

僕は笑ってそう言った。

恵美子と未穂は離れた場所から、怪訝な顔でその様子を覗いていた。

僕たちは、駅前のドトールコーヒーに入った。

仕事帰りのビジネスマンが意外という。

「こんな遅い時間に遊べるなら、もっと昌美と会ってあげればよかったのに」

僕はアイスコーヒーを飲みながら言った。

「そうだな……でも、彼女の家は二駅向こうだろ。意外と負担になってね」

負担……そう思う時点で、きっと駄目なんだよ。

僕はそう思ったが、口には出さなかった。

「友達が亡くなったって……」

オサムは躊躇しながら言った。

「うん。誰から？」

「ああ、昌美が言ってた。大学生と付き合ってたの？」

僕は彼の顔を見ていた視線を、窓の外へ移した。

「付き合ってたんじゃないよ。本当の友達だったんだ」

「そ、そうなんだ」

彼は何だか納得しない顔で僕を見つめているのが、外に向けた自分の視界の隅に見えていた。

何だか、前に感じた心地よさは、もう彼には無かった。

何がどう変わったのか判らない。

もしかして、変わったのは僕の方なのかもしれない。

僕たちは、取り留めの無い話をしばらくして店を出た。

自転車を走らせていると、夜風がだいぶ涼しくなったのを感じた。

近所の小さな公園の草むらからはコオロギの鳴き声がやたらと聞こえていた。

第29話

家に帰ると、玄関には父親の靴があった。

僕が玄関に入った気配を感じた母がリビングから顔を出す。

「お帰り亜希子。遅かったじゃない」

「うん。友達とお茶してきた」

「遅くなるときは電話しなさいって、言ってるでしょ」

「うん……」

「亜希子、ちよつとこっちへ来なさい」

父親の声リビングから聞こえた。

「ちよつと、あなたにも話があるのよ」

母親が僕を促した。

僕はソファに腰掛けると、小さく息をついた。

「お父さん、また転属になるみたいなの」

母親が先に切り出した。

そう言うことか。帰りが遅かったのに、何時もより小言も少ないわけだ。

「今度、東北に新しいホテルが建つんだ」

父親は口数少なくそう言った。

昇進も兼ねているらしく、父親にとってはいい話なのだろう。

「それで？ 何時？」

「来月中旬だな。父さんは、一足先に向こうへ行くと思う」

僕は黙って頷いて、何も言わなかった。

「本当にね、あっち行ったりこっち行ったり」

母親が小さく呟いた。

「まあ、それが仕事だから、仕方が無い」

父親も、苦笑いでそう言うだけだった。

僕はそのまま自分の部屋へ戻ると、何故か古いスピッツのCDをかけてベッドに寝転がった。

転校かあ……僕は素直にそう思っただけで、他には何も感じなかった。

別にたいして別れを惜しむ相手もない。

何処にいても、きっと僕は一人だ。今と変わりはない。

曲と曲の僅かな間に入り込む虫の音が、何だかとても切なく聞こえた。

僕が何かをしようがしまいが、時間は勝手に流れて過ぎてゆく。

僕は9月イッパイでバイトを辞めた。

引越す事を聞いた、恵美子と未穂は心から残念がってくれた。

もう直ぐこの学校ともオサラバだと思うと、何だか既に行くのがタルくて、遅刻が多くなった。

そんなある日の放課後、昇降口で見慣れない二人組みの女子に呼び止められた。

一人は背が高く、黒髪のショートだった。もう一人は少しぽっちゃりめで、シャギーの入った茶色い髪を肩まで垂らしている。

「あんだ、三田村亜希子でしょ」

「そうだけど」

「ちょっと来てくれる」

二人は僕の両腕を掴んだ。

そう言えば、隣のクラスにこんな連中がいたかもしれない。

「何なの？ あんたたち」

「いいから、ちょっと来て」

二人はそう言って、僕を体育館へ続く通路の陰に連れて行った。

「あんだ、転校するんだって？」

僕は二人の顔を交互に見ると

「だから？」

「あんた、レズなの？」

ノツポの黒髪が言った。

「はあ？」

「サクラにイタズラしようとしたんでしょ」

ノツポは薄ら笑いを浮かべて続けた。

「はあ？ 何言ってるの、知らないよ」

「どうりで男に靡かないわけだね」

茶髪のデブが言った。

僕から見れば、明らかにデブだ。

「くだらない……」

僕は履き棄てるように言って、その場を抜け出そうとした。

「逃げんなよ」

茶髪が僕の腕を掴んだ。

「しらねえよ」

僕が振り払うと、ノツポも、反対の腕を掴む。

二人は僕の身体を、体育館の外壁に押し当てて威圧して来た。

「何、あんた女に触って欲しいわけ？ それとも触る方？」

ノツポがそう言って、僕の胸を鷲掴みにした。

僕は反射的に振り払って、彼女を突き飛ばした。

「ざけんなよ」

茶髪が僕を突き飛ばす。

僕は二人を相手に暴れなければならなかった。

第30話

2対1だった。僕は自分の華奢な身体を恨んだ。

こっちを掴めば、あっちからどつかれる。

3人とも揉みくちやだったが、当然僕は不利だった。

バリバリと音と立てて、ブラウスのボタンが殆ど飛んで、肩の部分も裂けた。

下着が露になっても、反撃を止めるわけにはいかない。手を止めたら絶対負ける。

僕はデブの茶色い髪を思い切り掴んで引つ張り続けた。

ノッポの攻撃を防ぐためには、足も使う必要があった。

無我夢中で僕の蹴り出した足が、スカートの上からノッポの股間にめり込んだ。

彼女は苦悶の表情で身体を折り曲げた。

女性にも効くのだろうか……蹴られればとりあえず痛いという事か。

一人欠けた隙に、茶髪の髪の毛を再び引き寄せて腹に蹴りを入れる。

「おい！ 何やってんだ！」

誰かの声に、二人は反射的に僕から離れると、駆け出してあつという間に姿を消した。

凄い早業だった。

「亜希子か？」

そこに現れたのはオサムだった。片手にサッカーボールを持って佇んでいた。

「ど、どうしたんだよ……」

オサムは、僕の引き千切られたブラウスを見て言った。

僕は思わず両腕で胸を覆って、彼に背を向けた。

「こ、こっち見るなよ」

「あ、ああ。ごめん」

彼も慌てるようにそう言ってから後ろ向きになって

「何があっただんだ？」

「ただの、ちよつとした喧嘩だよ」

「ちよつとしたって……」

「ねえ、教室からあたしのジャージ取って来て」

「えっ？」

「ジャージ。こんな格好じゃ、先生にでも見られたらヤバイし」

「あ、ああ。ちよつと待ってろ」

オサムはそう言って、校舎へ駆けて行った。

僕は、誰にも見つからないように、身体を低くしてその場にしゃがみこむと、深く息について肩をすくめた。

何度か蹴られた脇腹が少し痛んだ。

オサムは息を切らして直ぐに戻ってきた。

大きく弾ませる息で、3階の教室までダッシュで行って来たのがわかった。

「ありがとう……」

僕は、彼から自分のジャージを受け取ると、背を向けたまま隠しもせずに、破れたブラウスを脱いでジャージに着替えた。

オサムは、慌てて反対側を向いたようだった。

「部活、途中じゃないの？」

「あ、ああ」

「もう、行きなよ」

「お前、大丈夫なのか」

「大丈夫だよ」

「でもさあ……」

僕はジャージのジップを首まで上げると、破れたブラウスを鞆に詰め込んだ。

「オサムの奴何処迄行つたんだ」

その時誰かの声が聞こえた。

「ニューボールの場所、教えたか？」

「知ってるだろ」

誰かがこちらに歩いてくる気配がした。

「ほら、先輩に叱られるよ」

僕がオサムを促すと、彼は思案に暮れたような顔をしてこちらを一瞥し、小走りに声のした方へ向かった。

僕は一つ溜息をつく、鞆を手に昇降口へ向かった。

昇降口には人影が見えた。

さっきのノツポの方だった。

乱闘では、身体を殴つても蹴飛ばしても髪の毛を掴んでも、3人共お互いの顔には手を出さなかった。

女同士が、無意識に顔を傷つける事を拒んでいるだろうか。

だから、相手の顔にも手を出さなかったのかもしれない。

僕が彼女に向かって駆け出すと、気配と足音に気づいてノツポはこちらを向いた。

声を出す間も無く、僕は鞆で彼女の顔面を力任せに打った。

ノツポの身体は後ろに弾けるように跳んで、思い切り床に倒れた。下駄箱の陰には、茶髪のデブもいた。

「ちよつと、何あんだ？」

とつさに声を上げる茶髪だったが、僕は続けざまに彼女の顔面を鞆で叩きつけた。

彼女は反射的に手で防いだが、そのまま下駄箱に頭を打ち付けて倒れた。

下駄箱のふたが衝撃で歪んでいた。

一瞬の興奮状態で息を荒げる僕は、二人を見下ろしながら「ふざけんな、バァ力」

心臓が大きく高鳴っていた。

僕は、自分の靴を履き替えると、そのまま家に帰った。

二人はまだ倒れたままだったが、動いていたので死んではないだろう。

第31話

翌日、学校へ行くとホームルームの後に、担任に呼び出された。昨日の二人は、ノッポの方が佐々木美紀。茶髪の方が高木ゆりと言うそうだ。

やはり、二人共隣のクラスの娘だった。

ゆりは脳震盪を起こしていて、教師に助けられたらしい。

ノッポの佐々木美紀は、目の周りが青く腫れ上がって鼻血も酷く、病院で手当を受けたそうだ。

手で殴るよりマシだと思った行為だったが、たまたま入っていた教科書が運悪く効果を発揮したらしい。

「お前、何やってんだよ。最近急に遅刻が増えたと思ったら」

担任は理由も聞かずに僕に向かってそう言った。

きつと、僕が一方的に悪い事になっているのだろう。

僕は黙ったまま、窓の外を見ていた。

やけに清々しい青空が続いて、今すぐ何処かへ行きたいと思った。

「もうすぐ転校なのに、何でこんな事するんだ？」

担任の口調は穏やかだったが、その視線は明らかに僕を責めるものだった。

僕は口を開かなかった。

担任は肩をすくめると

「とりあえず、彼女たちに謝罪しろ」

「はあ？」

「停学にはならないように、何とかするから」

彼は、いったい何をしたいのだろう。

きつと、あの娘たちの父兄からクレームが来ているのだろう。

「停学でいいです」

僕は、視線を外に向けたまま呟いた。

「そんな事言ったってお前、あと3日でこの学校とお別れだろう」

「じゃあ、今日で終わりでもいいです」

僕は、そう言っただん任の横をすり抜けると、そのまま職員室を出た。

「おい、三田村」

担任はドアの所までは追いかけて来たが、それ以上は追いかける気は無いようだった。

僕は教室に帰ると、机の中の教科書を全部鞆に詰め込んで、その場を後にした。

その姿に、声をかける者はいなかった。

みんなの無言の視線は、何だかとても痛く全身を突き刺した。

世界史の授業が始まっていたが、教師はポカンと僕を見ているだけだった。

「アッコ！」

廊下に出た時、背中で昌美の声がしたが、僕は立ち止まらなかった。

毎日通った北向きの廊下が、その時はやけに暗く感じた。

僕は知らぬ間に、洋介がいた病院へ来ていた。

病院の匂いは嫌いだったが、この匂い〓洋介のような気がして、なんだかとても懐かしく感じた。

彼との思い出の大半はここにあるような気がした。

洋介を訪ねてここに通った日々が、ものすごい昔の出来事のように思える。

「あら？ あなた」

若い看護師が休憩ロビーにいた僕を見つけて声をかけてきた。洋介の病室を担当していた看護師だった。

「また、誰か入院？」

僕は、テーブルに顎を寄せたまま、無言で首を左右に振った。

「学校はもう終わったの？」

その看護師は僕の向かい側に浅く腰を下ろした。

「終わった」

僕は、視線を伏せたままちいさく言うと、心のなかで、永遠に……と付け加えた。

彼女は再び立ち上がると、何処かへいなくなった。

僕は、テーブルに突っ伏したまま、深く息をついた。

しかし、少しするとさっきの看護師が戻ってきて

「あたし、今から休憩なんだけど、お茶でも付き合わない？」

彼女の言葉に、僕は顔を上げた。

最上階にある喫茶室で、僕はココアを目の前にして窓の外ばかりを眺めていた。

いつの間にか空はずいぶん高くなって、わた飴の欠片のような雲が、遠くに薄っすらと浮かんでいた。

「死んだら、男も女も無いのかな」

僕は不意に呟いた。

「えっ？」

「死んでも、やっぱり男と女はあるのかな」

「さあ、どうだろう」

看護師はエリカという名だった。

「あたしの両親は、あたしが小さい時に事故で亡くなったんだけど、もし死んだ後に男女が無くなったら可愛そうだな」

エリカはコーヒークップに手を当てて

「だって、男でも女でもなくなったら、お父さんとお母さんは夫婦でいられないでしょ」

僕はだまって彼女の顔を見つめた。

睫毛が長く見えるのは、ハイテクマスカラのせいか……

「そうだね……」

僕は、そう呟いて冷めかけたココアを飲んだ。

成分が分離して、ココアは底に沈んでいた。

「どうして、ここへ？」

「わかんない。ただ何となく足が向いた感じ」

僕はカップに視線を落したまま言った。

「お線香上げに行っただ？」

「えっ？」

「亡くなった人に会いたいときは、病院じゃなくて他に会える場所があるはずよ」

彼女はそう言って、優しく微笑んだ。

僕は洋介に会いたいのだろうか。彼に会いたくて病院へ行ったのだろうか。

そこにいるはずなんてないのに……

病院を後にした僕は、ただ街中をぶらつく以外にやる事は無かった。

駅前のネットカフェに入って時間を潰した。

隣のサラリーマンが、鼾をかいてバク睡していた。

マナーモードにした携帯の着信ランプが、しきりに点滅していたが、僕は一度も電話に出る事はしなかった。

第32話【最終話】

母親は学校に呼び出されたらしく、頭から湯気が出そうなほどに怒っていた。

夜中になつてから家に帰ると、1時間以上正座のままグダグダと説教を受けた。

携帯に何度も着信が入っていたのは、もちろん母親からだった。

「お母さんはいいよね、女だから……」

僕は思わずそう呟いてしまった。

「何言ってるの？ あなただって女でしょ」

母親は僕の妙な呟きに、怒りの顔を急激に静めて怪訝な表情を浮かべた。

僕はそのまま立ち上がって、階段を駆け上がった。

母親は、その場から動けずにリビングから僕の後姿を見ているだけだった。

携帯の着信者はもう一人いた。

昌美だ。彼女はメールも入れてよこしたが、その夜僕は返信をしなかった。

結局僕は、あれ以来学校には行っていない。

このまま転校の書類が出されて、あの学校とはオサラバだ。

引越しの日、朝一で来た引越しセンターの連中は、次々に家の荷物をトラックに運び込んでいた。

外国製の家具などは、クッション材で嚴重に梱包している。

父親は、一足先に引越し先へ仕事場を替えて、ホテル暮らしをしている。

もし家にいたら、僕はどれだけ怒鳴られていた事だろう。

あつという間に家の中はがらんどろになって、僕の部屋にも小さな鞆だけが残った。

何も無い部屋は以外に広かった。

ここへ越してきた時、既にベッドや机は入っていたので、この殺風景な部屋を見るのは初めてだ。

カーテンの無くなった剥き出しの窓から見える空は、まるで簡素な額縁に入った安っぽい風景画のようで、何だか奇妙な景色として僕の目に映っていた。

宣伝用の飛行船が、ゆつくりと動きながら、空に浮かんでいた。不意に携帯の着メロが鳴った。

昌美からのメールだった。

彼女とも、学校を後にして以来会っていない。

少しだけ未練はあるが、これでいいと思っていた。

『外にいるよ』

外？　僕は、部屋の窓に近づいて外を見下ろした。通りに昌美が立っているのが見えたので、僕は母親に気づかれないうちにそっと表へでた。

「学校は？」

「歯医者に行くって言って、早退した」

昌美はそう言って笑った。

近くの公園まで行って、ベンチに腰掛けた。

風は涼しくなったが、陽差はまだ暑かった。

「寂しくなるなあ、アッコがいなくなったら」

「昌美は仲いい人がたくさんいるから、大丈夫だよ」

「そんなの、上辺だけだよ」

昌美はそう言って寂しそうに笑った。

僕は、彼女のその表情が嬉しかった。

僕がいなくなる事を、寂しがってくれる人が、ここにいると言う

事が。

「ねえ、まだ今日時間あるの？」

昌美が言った。

*

*

*

*

小さなゴンドラは、大きな滑車に揺られながらまるで時間が止まったように見えた。

でもそれは、確かに少しずつ動いていて、気がつくとなんか場所に戻ってくる。

僕たちはみなとみらいで観覧車に乗った。

次第に人並みは小さくなって、空が近くに感じた。

何時もと違う水平線が見えて、海が大きく変わったような気がした。そして、自分が暮らすちっぽけな大地を見下ろして、些細な優越感に浸る。

ゴンドラの中では確かに時間が止まっていた。

動いている小部屋の、その中の空間だけが魔法を掛けられたみたいに止まるのだ。乗ってから元の場所へ帰るまでは、二人が貰った二人だけの時間だ。

上に向かう心地よさ、下へ向かう切なさ……

「あたしさ、前から亜希子とこれに乗ってみたかったんだ」

「どうして？ オサムと乗ればよかったじゃん」

「だってさ、こんな狭い所でこんな高い場所、気が置けない人じゃないと乗れないよ」

昌美はそう言って少しテレ笑いを浮かべた。

彼女の表現が、僕には嬉しかった。

少なくとも、僕は彼女にとって気が置けない相手だったのだ。

「昌美」

「なに？」

「あ、あたしさ……」

僕は一端言葉を呑み込んでから、再び口を開いた。
西に傾いた逆光の太陽が眩しかった。

「あたし、昌美の事……好き」

僕はそう言ってから、思わず「えへへ」と滑稽に笑った。

昌美は僕の顔をじっと見つめてから、少しずつ遠ざかる空を仰いで
「あたしも好き！」

そう言って笑った。

昌美がどう受け止めたか判らなかつたけど、いや、きっと女同士の友情の「好き」と思っただろう。

それでもよかった。

僕は初めて女性に対して自分の気持ちを言葉で打ち明けたのだ。

そして捉え方が違うとしても、彼女も僕を好きだと言ってくれた。
それだけで充分だった。

地上に到達すると、ゴンドラに掛けられた魔法は解けて、僕たちの時間が日常の喧騒に再び呑み込まれる。

その時僕は、少しでも横浜を離れたいと思った。

「メールしてね」

「うん。昌美も」

瞳に溜まった涙が零れ落ちないうちに、昌美は大きく手を振って
から、通りを駅に向かって駆けていった。

この先もう会うことが無いとしても、彼女を好きになってよかった
と思った。

そして、この横浜で僕は一人ではなかつたのだと、今頃になって
気づいた。

僕の横浜での生活はこれで終わる。

半年ほどの短い生活は、あまりにも心に残るモノが多くて、まる

でこの地で育ったような錯覚さえ起こる。

夕方の新幹線で、僕は母親と一緒に、これから暮らしが始まる東北の町へと発った。

トンネルを幾つも抜けると、窓の外には田畑が広がっていて、いかにも長閑な風景が続いていた。

遠くに聳える山々の向こう側へ静かに沈んでいく夕日が、なんだかとても切なく感じて、僕は少しだけ目の奥が熱くなって、朱色の光りを浴びながら瞬きをするのをじっと堪えていた。

それはきつと、空を染め上げる紅い太陽が、洋介と見た湘南の夕日に似ていたからかもしれない。

END

第32話【最終話】（後書き）

ここまで読んで下さった方々には、大変感謝いたします。ここで一端お話は完結いたしますが、亜希子の話は【みちのく編】へ続きます。しかしそれは、しばらくお時間をいただきます。

みちのく編は、言わずと知れた、刑部真夕に出会う話です。

タイトルは未定ですが、「Girl」が付いたらそれだと思ってください。

お付き合いいただき、有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6003b/>

G i r l s B r a v o ! (Dear Girl : 三田村亜希子の場合)

2010年10月8日12時52分発行